岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 225

婦本路古墳群

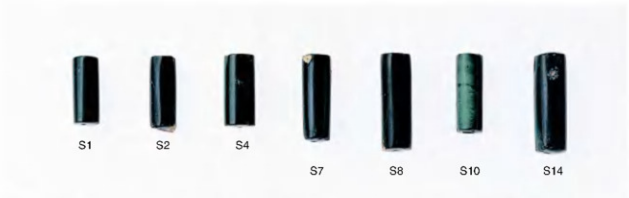
主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査 7

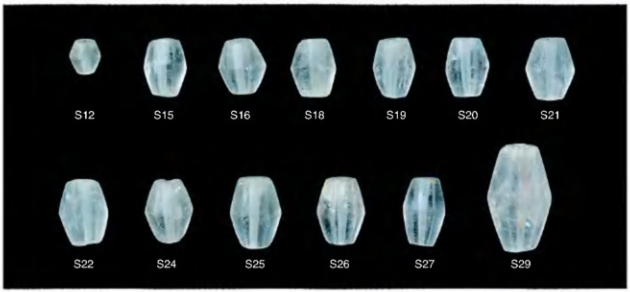
2010

岡山県教育委員会

調査地遠景（南東から）

巻頭図版2


S1
S2
S4
S7
S8
S10
S14


S12
S15
S16
S18
S19
S20
S21
S22
S24
S25
S26
S27
S29

G1
G2
G3
G4
G5
G6
G52
G8
G9
G12
G14
G15
G19
G20
G22
G25
G27
G33
G35
G40
G41
G43
G44
G45
G46
G47
G48
G49
G50
G53
G54
G55
G58
G65
G68
G73
G77
G82
G83
G92
G107
G121
G123
G125
G126
G128
G129
G131
G133

玉類

序

美作岡山道路は、県内循環型高速道路網を形成するために計画された地域高規格道路です。これにより、県北部と県南部の連携が強化され、県東部をはじめとした地域の社会・経済の活性化が期待されています。

岡山県教育委員会では、この事業に関して計画段階から、埋蔵文化財包蔵地の保護・保存をめぐる協議を関係部局と重ねてまいりました。その結果、事業の実施によって影響を受ける部分については、やむを得ず記録保存の措置を講じてきました。

その一部である主要地方道佐伯長船線の改築に伴って行われた発掘調査の成果については、これまでに6冊の報告書が刊行されており、本書で7冊目となります。

婦本路古墳群は、赤磐市弥上に所在する古墳時代後期の古墳群で、ここに収載しているのは、発掘調査対象となった2・3・4号墳の調査成果です。2号墳は、横穴式石室を有する古墳で、この地域では比較的古い石室であることがわかりました。また、3・4号墳は、竪穴式石室を有する古墳で、埋葬時の状態が良好に残されているとともに、3号墳では墳丘の拡張が判明するなど、貴重な成果が得られました。

この報告書が学術研究に寄与するだけでなく、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を物語る資料として広く役立つならば幸いです。

最後に、発掘調査の実施や報告書の作成に当たっては、埋蔵文化財保護対策委員会の委員の方々からは、有益な御指導・御教示を賜りました。また、関係各位から多大な御協力を賜りました。記して厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 児仁井克一

例　言

1　本書は、主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築（本線：熊山 IC 以南）に伴い、岡山県教育委員会が岡山県備前県民局建設部の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した縁本路古墳群の発掘調査報告書である。

2　主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査報告書としては、本書は 7 冊目の報告書である。

3　調査対象となった古墳は、縁本路 2・3・4 号墳で、岡山県赤磐市弥上 121-1 ほかに所在する。

4　古墳群名ともなっている小字の「縁本路」の読みについては、「ほぼろ」・「ほんぼろ」・「ほほろ」・「ふぼろ」などさまざまなものが聞かれるが、巻末の抄録に記載している遺跡のふりがなは、『熊山町史 大字史』（熊山町 1993）に従い、「ふぼろ」とした。

5　発掘調査は、平成 19 年度に岡山県古代吉備文化財センター職員内藤善史・柴田英樹・笹栗拓が担当して実施したもので、調査面積は 850 ㎡である。

6　発掘調査および報告書の作成にあたっては、「美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、下記の方々に委員を委嘱した。委員各位からは終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。なお、（　）は委嘱時の所属機関名である。

平成 19 年度

角南　勝弘（美咲町教育委員会）

宮岡　直人（岡山理科大学）

野崎　貴博（国立大学法人　岡山大学）

間壁　忠彦（倉敷考古館）

平成 21 年度

澤田　秀実（くらしき作陽大学）

白石　純　（岡山理科大学）

新納　泉　（国立大学法人　岡山大学）

間壁　忠彦（倉敷考古館）

行田　裕美（津山市教育委員会）

7　本書の作成は、平成 21 年度に岡山県古代吉備文化財センターにおいて、柴田が担当した。

8　本文の執筆は、第 1 章を柴田、第 2 章を光永真一・柴田、第 3 章以下を柴田・笹栗・内藤が担当し、文責は、章及び節、遺構ごとの文末に示した。また、全体の編集は柴田が担当した。

9　遺物写真の撮影については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。

10　本書収載の遺物および各種図面・写真等の記録は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻 1325-3）に保管している。

凡　例

1　本書に記載された高度は、海抜高である。

2　グリッドの座標値は、日本測地系に準拠しており、各種遺構図の方位は、日本測地系平面直角座標第Ⅴ系の座標北である。なお、巻末の抄録に記載した経緯度は、世界測地系に準拠している。

3　本書に掲載した地図のうち、第2図は、国土地理院発行の1/50,000地形図『和気』（平成8年）を、第4図は、同1/50,000地形図『岡山』（平成4年）と『和気』（平成8年）を、第5図は、同1/25,000地形図『方富』（平成7年）を複製して使用した。

4　上層断面図の土色、土器と石製品の色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修）による。また、一覧表の水晶製の玉を除く玉類の色調は、『新版色の手帖』（永田泰弘監修　2002年）により、系統色名とマンセル値を記載した。

5　各古墳・遺物実測図等の縮尺率は、下記のとおりである。

遺構：墳丘平面図　1/150　　墳丘断面図　1/60　　横穴式石室　1/50　　竪穴式石室　1/30

遺物：土器　1/4　　石製品　1/2　　金属製品　1/2、1/3、1/6　　ガラス製品　1/1

6　竪穴式石室については、3号墳のみ番号を付した。また、遺物の掲載番号は、それぞれ種類別に通し番号を付している。

7　遺物の掲載番号は、土器が番号のみ、それ以外は材質にしたがって下記の記号を番号の前に付した。

石製品：S　　金属製品：M　　ガラス製品：G

8　本書で用いる時代および時期区分は、一般的な政治史区分に準拠し、必要に応じて西暦年代等を併用した。また、本古墳群に関わる時期については、陶邑での須恵器編年（田辺昭三『陶邑古窯址群1』平安学園考古学クラブ　1966）を援用した。

目　次

巻頭図版
序
例言
凡例
目次
第１章　地理的・歴史的環境 …… 1
第２章　調査の経緯と経過 …… 5
　第１節　発掘調査にいたる経緯 …… 5
　第２節　発掘調査および報告書作成の経過 …… 8
　第３節　発掘調査および報告書作成の体制 …… 10
　第４節　婦本路２号墳の保存 …… 10
第３章　調査の概要 …… 12
　第１節　古墳群の概要 …… 12
　第２節　婦本路２号墳 …… 15
　第３節　婦本路３号墳 …… 26
　第４節　婦本路４号墳 …… 38
第４章　まとめ …… 48
　第１節　遺構・遺物について …… 48
　第２節　可真・弥上地区における婦本路古墳群の位置づけ …… 53
遺物一覧表 …… 59
図版
報告書抄録

図　目　次

第１図　沉跡位置図（1/1,500,000） …… 1
第２図　遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図（1/30,000） … 2
第３図　弥上地区の主要古墳分布図（1/10,000） …… 3
第４図　美作岡山道路と調査対象遺跡位置図（1/80,000） … 6
第５図　主要地方道倉敷長船線（瀬山IC以南）と
　　調査対象遺跡位置図（1/25,000） …… 6
第６図　路線と古墳群位置図（1/3000） …… 7
第７図　施工範囲図（1/300） …… 11
第８図　掘削前地形図（1/500） …… 12
第９図　古墳に伴わない遺物（1/4） …… 14
第10図　土壙墓平面・断面図（1/300） …… 14
第11図　墳丘平面図（1/150） …… 15
第12図　墳丘断面図（1/60） …… 16
第13図　石室天井見上げ図（1/50） …… 17
第14図　横穴式石室（1/50） …… 18
第15図　石室内土層断面図（1/30） …… 19
第16図　排水溝（1/50・1/30） …… 20
第17図　閉塞施設（1/30） …… 21
第18図　箱式石棺（1/30） …… 22
第19図　石室内遺物出土状態（1/30） …… 23
第20図　出土遺物①（1/4） …… 24
第21図　出土遺物②（1/6・1/3・1/2） …… 25

第22図　墳丘平面図（1/150）……26
第23図　墳丘断面図（1/60）……27
第24図　台列（1/80・1/40）……28
第25図　右室1掘り方・土層断面図（1/50）……29
第26図　竪穴式右室1（1/30）……30
第27図　石室1遺物出土状態（1/20）……31
第28図　玉類出土状態（1/6）……31
第29図　石室2掘り方・土層断面図（1/50）……32
第30図　竪穴式石室2（1/30）……33
第31図　石室2遺物出土状態（1/20）……34
第32図　石室1出土遺物①（1/4・1/3・1/2）……35
第33図　石室1出土遺物②（1/2・1/1）……36
第34図　石室2出土遺物（1/4）……37
第35図　墳丘外および盗土内の出土遺物（1/4・1/2）……37
第36図　墳丘平面図（1/150）……38
第37図　墳丘断面図（1/60）……39
第38図　右列（1/80・1/40）……40
第39図　右室掘り方・土層断面図（1/50）……41
第40図　竪穴式右室（1/30）……42
第41図　右室内遺物出土状態（1/20）……43
第42図　玉類出土状態（1/6）……43
第43図　石室外遺物出土状態（1/20）……44
第44図　出土遺物①（1/4）……45
第45図　出土遺物②（1/2・1/1）……46
第46図　出土遺物③（1/1）……47
第47図　土器転用枕をもつ古墳分布図……50
第48図　土器を伴う竪穴系列葬施設の古墳分布図
（岡山県・半に古墳後期）……50
第49図　可真地区周辺の古墳分布図……53
第50図　備前南部における6世紀後半代の
大形横穴式右室……55
第51図　可真地区周辺の6・7世紀代の古墳の変遷……56

巻頭図版目次

巻頭図版1　調査地遠景（南東から）
巻頭図版2　玉類

図版目次

図版1　1　弥上馬区遠景（北西から）
2　調査地遠景（北西から）
図版2　1　調査前全景（南西から）
2　調査後全景（南西から）
図版3　1　2・3・4号墳全景（北西から）
2　盛土除去後の2・3・4号墳全景（上空から）
図版4　1　2号墳全景（西から）
2　2号墳全景（南から）
3　2号墳北側　墳丘断面（北から）
4　2号墳南側　墳丘断面（南から）
5　2号墳玄室岸面（西から）
図版5　1　2号墳玄室整面（西から）
2　2号墳玄室～羨道（東から）
図版6　1　2号墳羨道北壁（南西から）
2　2号墳羨道　排水溝東石出土状態（東から）
3　2号墳玄室　排水溝（盗石除去後）（西から）
4　2号墳閉塞施設立面（西から）
5　2号墳閉塞施設（南から）
図版7　2号墳出土遺物
図版8　1　3号墳全景（南から）
2　3号墳初期の南側石列（南から）
3　3号墳拡張時の南側石列（南東から）
4　3号墳埋葬施設と石列（上空から）
図版9　1　3号墳竪穴式石室1と石列（南から）
2　3号墳墳丘断面（北から）
3　3号墳粘質時の盗土断面（西から）
図版10　1　3号墳竪穴式石室1　天井石（北から）
2　3号墳竪穴式石室1（北から）
3　3号墳竪穴式石室1　東壁（北西から）
4　3号墳竪穴式石室1　西壁（南東から）
5　3号墳竪穴式石室1　遺物出土状態（北から）
図版11　1　3号墳竪穴式石室2　天井石（東から）
2　3号墳竪穴式石室2（東から）
3　3号墳竪穴式石室2　北壁（南西から）
4　3号墳竪穴式石室2　南壁（北東から）
5　3号墳竪穴式石室2北側掘り方断面（東から）
6　3号墳竪穴式右室2東小口
遺物出土状態（西から）
図版12　3号墳出土遺物①
図版13　3号墳出土遺物②
図版14　1　4号墳全景（南西から）
2　4号墳埋葬施設と石列（上空から）
3　3号墳と4号墳（南西から）
4　4号墳北側石列（北から）
5　4号墳南側石列（南から）
図版15　1　4号墳竪穴式石室天井石と遺物出土状態（北から）
2　4号墳竪穴式石室（北から）
3　4号墳竪穴式石室　西壁（南東から）
4　4号墳竪穴式石室　東壁（南西から）
5　4号墳竪穴式石室

南小口遺物出土状態（北から）
6　4号墳墓次式石室
北小口遺物出土状態（南から）
図版16　4号墳出土遺物

写真目次

写真1　現地説明会の様子（平成19年6月16日）……目次末
写真2　現地説明会の様子（平成19年8月4日）……目次末
写真3　発掘調査作業状況（南西から）……8
写真4　埋蔵文化財保護対策委員会現地視察
（平成19年6月8日）……8
写真5　2号墳墳丘トレンチ埋め戻し状態（南から）……11
写真6　2号墳石室閉塞状態（西から）……11
写真7　1号墳横穴式石室（北西から）……13
写真8　2号墳掘削前状態（南西から）……13
写真9　附属施設①（東下部・西から）……21
写真10　附属施設②（南西から）……21
写真11　附属施設③（西から）……21
写真12　附属施設④（東上部・西から）……21
写真13　墓上内の石（石室奥・東から）……41

表目次

表1　土要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）
道路改築に伴う発掘調査一覧表……5
表2　文化財保護法に基づく文書一覧表……9
表3　総本路古墳群 須恵器観察表……48
表4　土器を伴う竪穴系埋葬施設の古墳一覧表
（岡山県・羊に古墳後期）……51
表5　総本路古墳群の副葬品組成……54
表6　土器観察表……59
表7　玉類一覧表……60
表8　石製品一覧表……62
表9　金属製品一覧表……62

写真1　現地説明会の様子（平成19年6月16日）

写真2　現地説明会の様子（平成19年8月4日）

第１章　地理的・歴史的環境

婦本路古墳群は、岡山県赤磐市弥上に所在する古墳時代後期の古墳群である。

赤磐市は、岡山県の南東部に位置し、南から西にかけての境界の大半は岡山市と接し、東は和気郡和気町と接する。この市名は、平成17年３月の合併によって新しく付けられたもので、それ以前における当古墳群の所在地は、赤磐郡熊山町弥上であった。この郡名もまた、明治33年の赤坂郡と磐梨郡の合併により成立したものである。旧熊山町（以下、熊山地域）に関わる郡域は、奈良時代後期までは複雑に変遷するが、その西部については、奈良時代後期以後、備前国磐梨郡に属する。本古墳群の所在する弥上やこの周辺は、磐梨郡珂磨郷の可能性が高いとされている。

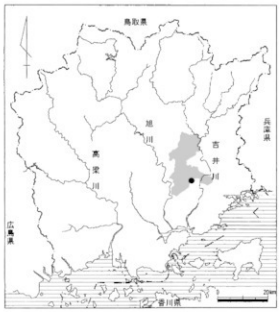
熊山地域は、市域の南東部を占め、中央部を岡山県の三大河川のひとつである吉井川が流れている。周囲は、標高507.8ｍの熊山山塊や、標高300ｍ前後の山塊に取り囲まれ、その間を流れる河川に沿って低地が形成されている。おもな低地は、吉井川右岸域とその支流である小野田川の流域、さらに小野田川に流れ込む可真川流域に認められる。山塊からのびる丘陵上には、多くの遺跡が確認されているが、低地の遺跡については、現在のところ、大規模なものや詳細が明らかなものは少ない。表層地質分布では、東半部の流紋岩地帯、西半部の花崗岩地帯に大きく分けることができる。両者には風化の程度に差があり、山容も異なる。花崗岩地帯にくらべ、流紋岩地帯は風化が進んでおらず、急峻な地形のためか、山裾などには、比較的遺跡が少ない。

弥上・可真上地区は、標高240.7ｍの大森山に源がある、可真川の上中流域にあたる。当地区は、東から南にかけて大盛山・大森山山塊、西には甘古木丘陵（桜ヶ丘丘陵地）がひかえており、南北にのびる谷地形となっている。甘古木丘陵の遺跡については、宅地開発によって今では詳細が不明であるが、対する東側や北側の山塊には、古墳をはじめとして多くの遺跡が確認されている。

以下、熊山地域、とりわけ磐梨郡域にあたる熊山地域西部を中心に、その歴史について概観する。

この地域において、明確に人びとの生活痕跡が確認できるのは、縄文時代からである。小野田川上流の丘陵上にある岡遺跡の発掘調査では、落し穴が確認され、中流左岸の松木遺跡では、縄文時代晩期から弥生時代前期の土器や石器が採集されている。また、岡山市東区瀬戸町（旧赤磐郡、東部は古代の磐梨郡）の鍛冶屋Ｄ遺跡の発掘調査では、流路から縄文時代中期～晩期の遺物が多く出土している。これらは、この頃から、人びとが低位部へも進出したことを示すものであろう。

弥生時代中期から後期にかけては、多くの遺跡が分布するようになり、発掘調査例も多くなる。岡遺跡や佐古遺跡、前内池遺跡、土井遺跡では、竪穴住居や段状遺構、土壙墓や土器棺墓などが確

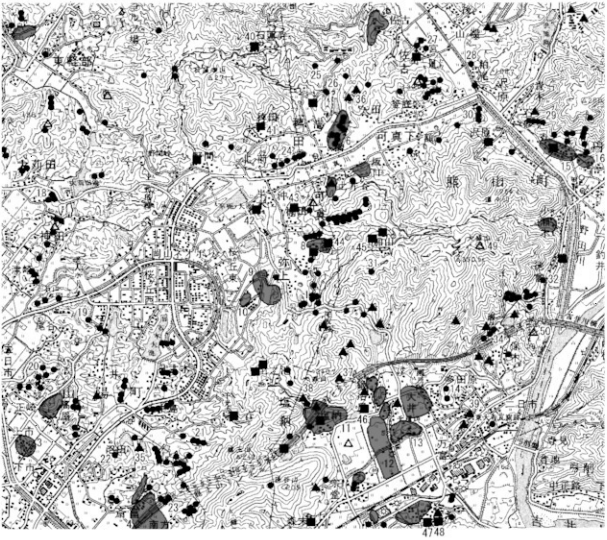


第1図　遺跡位置図（1/1,500,000）

認され、丘陵上の集落と集団墓のようすが明らかとなった。特筆すべき遺物として、谷の前遺跡の銅鐸形土製品があげられる。このように、当地域では、丘陵の集落遺跡の調査が進んでいるが、低地に展開する遺跡は明らかでない。ただし、前述の鍛冶屋Ｄ遺跡では、中期の集落が調査された。

弥生時代後期では、丘陵上に墳丘墓が確認されている。谷の前遺跡では、石列を施した一辺５～６ｍの墳丘墓が調査された。また、可真川が小野田川に合流する地点を臨む丘陵上には、一辺12.5ｍの丸崎４号墓が所在する。ここからは、特殊器台形土器と特殊壺形土器が出土している。岡山市東区瀬戸町にも、方形の墳墓とみられる経塚１・２号墓が所在する。

古墳時代の集落については、現在のところ良好な遺跡が確認されていないが、後期を中心に多くの

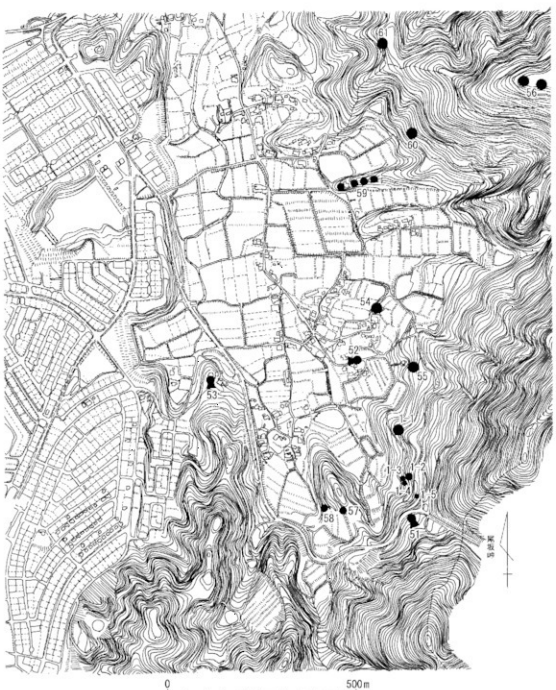


1　婦本路古墳群　2　佐古谷遺跡　3　上市遺跡　4　斎富遺跡　5　佐古遺跡　6　前内池遺跡・前内池古墳群
7　土井遺跡　8　谷の前遺跡　9　光中田遺跡　10　渦輪遺跡　11　塩納成遺跡　12　鍛冶屋Ｄ遺跡
13　千種山遺跡　14　経塚１号墓・２号墓　15　松木遺跡・松木寺跡　16　円光寺遺跡　17　大松古墳群
18　慶貞古墳群　19　片井池古墳　20　正崎古墳群　21　中島東古墳群　22　沼田古墳　23　斎富古墳群
24　稗田古墳群　25　大峯古墳　26　薄前内池１号墳　27　宮の乢古墳　28　和尾古墳　29　山吹古墳群
30　丸崎古墳群　31　経畦古墳　32　とんぎり山古墳　33　岩尾古墳群　34　松尾古墳群　35　別所窯跡
36　三ッ池１・２号窯　37　大谷窯跡　38　勘定口窯跡　39　史跡万富東大寺瓦窯跡　40　石蓮寺跡
41　妙光寺跡　42　大高寺跡　43　妙円寺跡　44　慶運寺跡　45　円福寺跡　46　吉岡廃寺
47　妙見下廃寺　48　五反田廃寺　49　大盛山城跡　50　保木城跡

第2図　遺跡の位置と周辺の主要遺跡分布図（1/50,000）

古墳が築造されている。前期の前方後円墳としては、古井川左岸の武宮古墳（墳長59ｍ）が確認されているに過ぎない。可真川左岸の稗田２号墳は、墳長24.5ｍを測る前方後円墳であるが、詳細な時期は不明である。中期後半からは、竪穴式石室を有する古墳が点在している可能性がある。発掘調査が行われた丸崎2･3号墳は、竪穴式石室を有する、５世紀後半～６世紀の古墳であることが判明している。

後期後半からは、横穴式石室を有する古墳が、各地で築造されている。特に弥上・可真上地区では、大きな石室を有する前方後円墳や円墳が集中する（第３図）。弥上古墳（墳長30ｍ）や小丸山古墳（墳長



1-1　郷本路１号墳　1-2　郷本路２号墳　1-3　郷本路３号墳　1-4　郷本路４号墳　1-5　郷本路５号墳
51　弥上古墳　52　小丸山古墳　53　塚木古墳　54　畑古墳　55　見上古墳　56　八つ塚古墳群（1～14号墳）
57　坪の山１号墳　58　坪の山２号墳　59　藤田神社裏古墳群（1～4号墳）　60　小山古墳　61　上の段古墳

第3図　弥上地区の主要古墳分布図（1/10,000）

33 m)は前方後円墳で、塚本古墳もその可能性が指摘されている。見上古墳、畑古墳や八つ塚3号墳の石室は、全長が9 mを超え、緑本路1号墳もそれに近い規模の可能性がある。他の地区では、吉井川沿いに、前方後円墳の可能性のあるとんぎり山古墳が、小野田川と可真川の合流点近くに箱尾古墳が位置する。とんぎり山古墳の石室は、両袖式で、使用石材が比較的小振りであることから、この地域では古い様相を示しており注目される。他にも、岡山市東区瀬戸町の経畦古墳は、径20 mの古墳で、大きな横穴式石室を有する可能性が高く、立地がかなり高いという特徴がある。本古墳群の調査では、こうした横穴式石室墳と竪穴式石室の古墳が混在することが明らかになった。

以上の古墳や、この周辺地域の古墳では、埴輪や陶棺を伴うことが多い。その中に位置する上井遺跡において、埴輪と陶棺を焼成した窯が2基確認されたことは、それらの生産と供給に関する観点からも意義は大きい。さらに、上井遺跡の須恵器窯や万富東大寺丸窯跡をはじめとして、熊山地域や周辺地域では、古代から中世にかけて、須恵器や瓦、製鉄・鍛冶などの生産遺跡が点在している。これらから、当地域が、備前地域の生産拠点のひとつであったことは明らかで、その始まりを古墳時代後期に求めることができるようである。このような地域の特性と、それをめぐる周辺勢力とのさまざまな関係が、奈良時代以前の寺院分布や、度重なる郡域の変遷にも現われているかもしれない。

当地域の生産拠点としての発展には、中国山地から瀬戸内海へ流れ込む吉井川の役割は大きいものであったと推測される。また、古代の山陽道が、熊山地域の可真地区を通過した可能性が高いことも、これに関係しているかもしれない。備前国内に置かれた山陽道の駅家のうち、珂磨駅が熊山地域内に所在したと考えられている。しかし、その比定地には、現在の可真上・可真下付近とする考えと、松木付近とする考えがある。これまでに知られている遺跡では、古代の土器や瓦が出土する松木遺跡・松木寺跡付近が、その有力候補にあげられる。

古代・中世以降では、石蓮寺山に報恩大師開基の備前48カ寺のひとつ、石蓮寺の跡が認められ、当地域への影響は多大であったとされる。また、中世以来の備前地域は日蓮宗徒が多く、特に磐梨郡は不受不施派が多い地域であった。寛文年間の、岡山藩主池田光政による宗教統制では、郡内で14カ所の寺院が廃寺となり、そのうち日蓮宗の寺院は11を数える。妙円寺や円福寺などがそれに該当する寺院で、慶運寺跡では発掘調査が行われ、室町時代以降の建物や井戸、墓などが確認された。(柴田英樹)

参考文献

『熊山町史　通史編』熊山町　1994
『岡山県史　第18巻　考古資料』岡山県　1986
「江岡陸夫『岡山県赤磐郡熊山町武宮古墳について』『岡山県埋蔵文化財報告』6　岡山県教育委員会　1976
「丸崎古墳群」『岡山県埋蔵文化財報告』17　岡山県教育委員会　1987
吉岡廃寺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』49　岡山県教育委員会　1982
「前内池遺跡　前内池古墳群　佐古遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』174　岡山県教育委員会　2003
「八ヶ美遺跡　八ヶ美製鉄遺跡　岡遺跡　小坂古墳群　才地古墳群　才地遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』178　岡山県教育委員会　2004
「塩納成遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』187　岡山県教育委員会　2005
土井遺跡　谷の前遺跡　慶雲寺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191　岡山県教育委員会　2005
「塩納森井先遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』211　岡山県教育委員会　2007
「鍛冶屋D遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』219　岡山県教育委員会　2009

第２章　調査の経緯と経過

第１節　発掘調査にいたる経緯

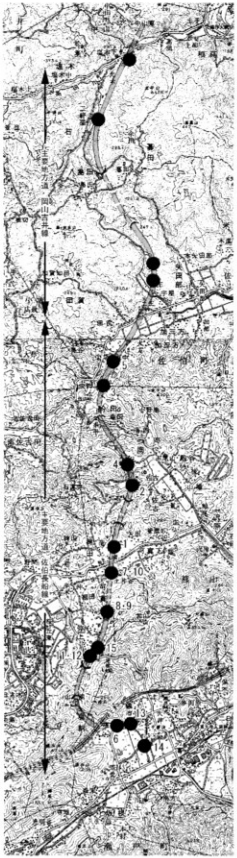
岡山市東区瀬戸町から勝田郡勝央町を結ぶ美作岡山道路のうち、旧赤磐郡吉井町以南の区間に係る埋蔵文化財の取扱いについては、平成８年度に当時の岡山県東備地方振興局と岡山県教育委員会とが協議を重ねた。その結果、事業対象地内の埋蔵文化財包蔵地については、事前に発掘調査を実施し、調査の結果、重要な遺構等が発見された場合は別途協議することを条件に、記録保存の措置をとることとした。その後、この区間の道路改築事業は、佐伯 IC を境に、北を主要地方道岡山吉井線、南を主要地方道佐伯長船線と区分されている。

発掘調査は、詳細設計に基づく用地買収の進捗に合わせて、平成９年度に着手した。これ以降も分布調査及び試掘調査による新発見遺跡への対応を繰り返しながら、平成21年度までに第４図に示す16か所（26遺跡）の調査を実施している。このうち、主要地方道佐伯長船線に係る部分の調査については、表１と第５図に詳しい。

表1　主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査一覧表

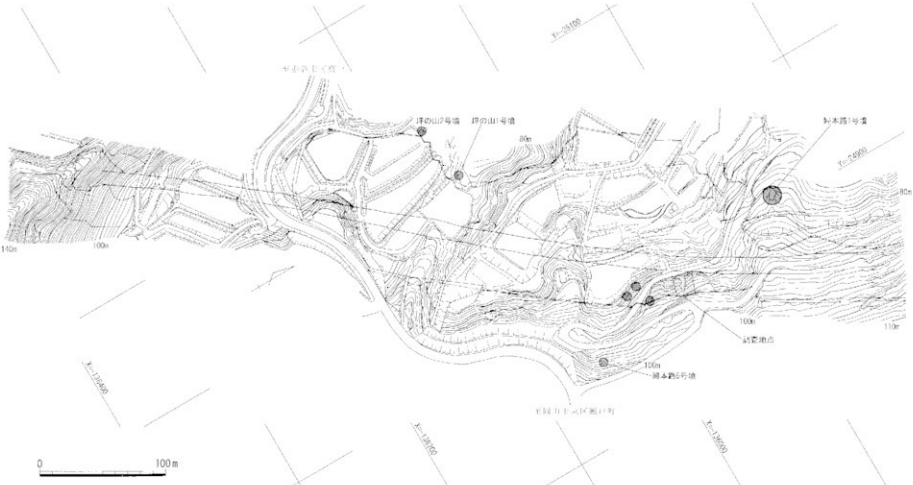
	調査対象遺跡名	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	調査担当者	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告	
						巻号	刊行年
1	狐内遺跡群 前寺地区遺跡	赤磐市可真下・塔谷	H9.4.1 ～ H10.8.31	15,150	渡貫英治・三宅由美・内藤雅文・砂　泰幹・鎗原泰介・澤山孝之・尾上元規・時實奈歩・佐倉朋香・加藤知弘	174	2003
2	窪木遺跡	赤磐市窪木・町	H11.2.1 ～ H11.10.22	5,080	澤山孝之・宮山博文・下濱　貴		
3	八ヶ反遺跡 八ヶ反奥谷遺跡	和気郡和気町小坂	H11.11.4 ～ H11.12.4	1,260	澤山孝之・宮山博文		
4	前置跡	赤磐市周匝	H12.4.1 ～ H12.8.31	2,500	二宮治夫・下濱　貴		
5	小坂台遺跡（１・４分冊） オ池遺跡群 才地遺跡	和気郡和気町小坂	H12.4.1 ～ H12.7.4	514	下澤公明・澤山孝之・谷村圭介	178	2004
			H12.9.1 ～ H12.11.30	4,600	二宮治夫・下濱　貴		
			H12.5.8 ～ H13.12.27		下澤公明・浅倉秀昭・荒永真一・澤山孝之・下濱　貴・谷村圭介・高畑美輝		
6	塩納成遺跡	岡山市東区瀬戸町塩納	H15.5.1 ～ H15.10.10	2,160	才土　弘・杉山　浩	187	2005
7	上十遺跡	赤磐市吉井・周匝	H14.4.1 ～ H15.9.30	6,145	山磨康平・荒永真一・亀山行雄・物部茂樹・重根弘和・福井　優	191	2005
8	谷の前遺跡		H13.10.1 ～ H14.5.14	3,520	浅倉秀昭・下澤公明・荒永真一・亀山行雄・重根弘和・高畑美輝・谷村　学		
9	慶運寺跡		H12.10.1 ～ H13.1.31	1,030	浅倉秀昭・下濱　貴		
10	境ヶ原遺跡（一次調査のみ）		H11.12.5 ～ H11.12.15	70	澤山孝之・宮山博文		
11	小瓜遺跡		H14.5.15 ～ H14.6.24	165	荒永真一・亀山行雄・重根弘和		
12	百々川遺跡（一次調査のみ）		H14.5.20	20	荒永真一・亀山行雄・重根弘和		
13	塩納東上角遺跡	岡山市東区瀬戸町塩納	H17.4.1 ～ H17.9.30	1,900	山磨康平・小松原孟弘・園　奈参	211	2007
14	鍛冶屋Ｄ遺跡	岡山市東区瀬戸町鍛冶屋	H17.4.1 ～ H18.3.31 H18.11.1 ～ H19.3.31	13,890	山磨康平・二宮治夫・白神典之・阿部芳郎・大橋雅也・小松原孟弘・小鴨智那・河合　忍・園　奈参・末田亮彦・石川勇貴・山崎幸雄	219	2009
15	鉾本鏡吉遺跡（2・3・4号墳）	赤磐市軽上	H19.4.1 ～ H19.9.30	850	乗藤由光・福井英治・重根　弘	225	2010

※　番号は、第４・５図　の番号に対応する。



第4図　美作岡山道路と調査対象遺跡位置図（1/80,000）
※図中番号は、表１の遺跡番号に対応する

第5図　主要地方道佐伯長船線（熊山IC以南）と調査対象遺跡位置図（1/25,000）
※図中番号は、表１の遺跡番号に対応する



第6図　路線と古墳群位置図（1/3,000）

婦本路古墳群については、平成10年12月に実施した現地踏査において、３・４号墳が用地内に所在するが、２号墳は用地外とされていた。逆にこの時点では、谷を挟んだ西の尾根に所在する坪の山１・２号墳の２基を、用地内と認識していた。ところが、平成13年秋に用地杭が現地に設置されると、坪の山１・２号墳はいずれも用地外に位置し、婦本路２号墳の大半が用地にかかることが確認され、婦本路２～４号墳の３基が発掘調査対象となった(第６図)。用地買収が完了し、発掘調査を実施したのは、平成19年度である。

主要地方道作伯長船線（美作岡山道路）道路改築事業予定地のうち、赤磐市以北における発掘調査は、この婦本路古墳群をもって終了した。

なお、同事業予定地で岡山市東区瀬戸町城に所在する埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、平成21年４月、岡山市の政令市移行に伴って、事業主体が岡山県から岡山市へ移管されたため、岡山市教育委員会の対応となる。　（光永真一）

第２節　発掘調査および報告書作成の経過

１　発掘調査の経過

発掘調査は、３基の古墳が所在する斜面、850㎡を対象として実施した。調査員は３名、調査期間は、平成19年４月から９月の６か月であった。

調査は、作業場の環境整備を行いながら、掘削前の地形測量を行うことから始め、その終了部分から表土掘削を進めた。区域内には、道路や用水路等が横切っていたので、交通と発掘作業の安全を考慮して、足場を設けるなどの対策を講じた。調査残土は、西の斜面下に排出するため、２号墳とその北部の残土排出については、一輪車で道路を通過させざるを得なかった。また、調査地は、急な傾斜地であったので、残土排出用に簡易な装置を製作して災害防止を図った(写真３)。

調査が進み、２号墳が比較的古い横穴式石室を有する古墳で、閉塞施設などが良好に残っていることや、３・４号墳の墳丘裾に石列を施していることが明らかになった。この時点で、埋蔵文化財保護対策委員会を開催し、委員の方々から、調査に対する御指導と有益な御助言をいただいた(写真４)。その後、成果を公開するため、現地説明会を開催した(日次末、写真１)。さらに、３・４号墳では、埋葬施設が竪穴式石室で、埋葬時の様子を留めた遺物の出土状態や墳丘拡張などの新たな成果が得られたため、２回目の埋蔵文化財保護対策委員会を開催し、後日現地説明会を行った(日次末、写真２)。

写真３　発掘調査作業状況（南西から）

写真４　埋蔵文化財保護対策委員会現地視察
（平成19年６月８日）

後述するように、２号墳は石室内と墳丘のトレンチ調査を行ったところで調査を終了し、３・４号墳については、墳丘と石室の解体を行い、すべての調査を９月28日に完了した。（柴田）

発掘調査日誌抄

平成19年

4月２日（月）調査準備開始
4月９日（月）調査開始（資材搬入等）
4月10日（火）掘削前地形測量開始
4月13日（金）２号墳調査開始
4月19日（木）掘削前地形測量終了
4月25日（水）３・４号墳調査開始
6月８日（金）埋蔵文化財保護対策委員会開催
6月16日（土）現地説明会開催（参加者230名）
6月20日（水）空中撮影実施
8月３日（金）埋蔵文化財保護対策委員会開催
8月４日（土）現地説明会開催（参加者120名）
8月７日（火）空中撮影実施
9月14日（金）２・４号墳調査終了
9月20日（木）３号墳調査終了
9月27日（木）資材撤収
9月28日（金）調査終了

表2　文化財保護法に基づく文書一覧表

埋蔵文化財発掘の通知（法第94条第１項（当時法第57条の３））

文号番号日付	遺跡および仮称	所在地	面積（㎡）	目的	届出者	期間	主な指示事項
教文somu第６号H19.4.4	改布尻・奥菩路・郡城跡・城野跡・社寺跡・古墳・その他の墓記代埋６号墳ほか	賀山町下高下71-12番地ほか	1,130,000	道路建設	岡山県東備地方振興局長　笠原直之	H19.4.9～H17.3.31	発掘調査

埋蔵文化財発掘調査の報告（法第99条）

文号番号日付	遺跡および仮称	所在地	面積（㎡）	原因	報告者	担当者	期間
岡古調芳2002号H19.4.10	古坂屋本店古墳群	赤磐市徳益121 1ほか	850	道路	岡山県古代吉備文化財センター所長	庄菅幸文・柴田崇顕・菅栄一郎	H19.4.1～H19.9.30

埋蔵文化財発見通知（法第100条第２項）

岡山県文書番号日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文somu芳740号H19.9.28	土師ほか 計型3 箱7 袋	赤磐市徳益121 1ほか 弥生遺物包蔵地	H19.4.9～H19.9.28	岡山県教育委員会教育長 竹野八洲雄	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター

2　報告書作成の経過

報告書の作成は、調査後１年９か月を経過した、平成21年度の７月から、岡山県古代吉備文化財センターで作業を開始した。

遺構については、実測図を再点検しながら、個別遺構図と全体図の下図を作成し、トレースを行った。遺物については、完形の土器が多かったが、それ以外の土器について復元作業にかかり、同時に実測を要する各種遺物の選別を行った。その後、遺物の実測作業、トレース、写真撮影を進めた。なお、小さく砕けていたガラス小玉は、計測のみができた２点と、さらに小さいものについても一覧表に記載した。続いて、仕上がった図や写真をもとに割り付け作業を行い、原稿を執筆した。ほとんどの遺構・遺物等の図については、業者委託によってデジタルデータ化を行い、印刷原稿としたが、写真は、一部のデジタルカメラ撮影データを除き、紙焼き原稿である。（柴田）

第3節　発掘調査および報告書作成の体制

本書収載の婦本路古墳群の発掘調査は、平成19年度に行い、平成21年度に遺物整理・報告書作成を実施した。以下に調査・報告書作成の体制を記す。（柴田）

平成19年度

岡山県教育委員会

教育長	門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長	神田　益穂

文化財課

課長	藤井　守雄
参事	木山　潤郎
参事	田村　啓介
総括副参事（埋蔵文化財調査長）	光永　真一
主任	小嶋　善邦
主任	金出地敬一

岡山県古代吉備文化財センター

所長	高畑　知功
次長（総務課長）	小林　勝
参事	岡田　博
副参事	中島　謙次
＜総務課＞	
総括副参事（総務班長）	若林　一憲
主任	福池　光修
＜調査第二課＞	
課長	平井　泰男
総括副参事（第二班長）	内藤　善史（調査担当）
主任	柴田　英樹（調査担当）
主事	笹栗　拓（調査担当）

平成21年度

岡山県教育委員会

教育長	門野八洲雄

岡山県教育庁

教育次長	増本　好孝

文化財課

課長	三村　修
参事	田村　啓介
総括副参事（埋蔵文化財調査長）	光永　真一
主任	米田　克彦
主任	半井　利尚

岡山県古代吉備文化財センター

所長	児仁井克
次長（総務課長）	小林　勝
参事	中野　雅美
＜総務課＞	
総括副参事（総務班長）	上田　利弘
主任	中島　忍
＜調査第三課＞	
課長	宇垣　匡雅
総括上幹（第二班長）	人橋　雅也
主幹	柴田　英樹（報告書担当）

調査協力者

白石　純（岡山理科大学、赤色顔料分析）

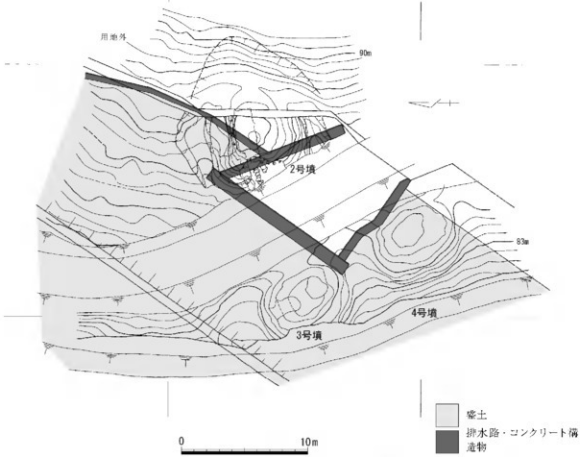
第4節　婦本路2号墳の保存

調査が進展するなかで、2号墳の石室床面は用地内にあるが、奥壁石材やそれに接する天井・側壁石材が用地外に及ぶことや、施工の影響が古墳の一部にとどまることが明らかになった（第7図）。前者は、石室解体が用地外に影響を及ぼすことを意味した。後者は、この地点が盛土施工で、墳丘を掘削する可能性があるのは法尻の排水路部分のみであり、また現道を活かすトンネルのコンクリート擁壁は、羨道前半と墳丘前端部分に影響を与えるものの、石室と墳丘の大半は残存することを意味した。

この二点を勘案し、文化財保護の立場から、2号墳の現状保存の可能性を探ることとなった。

この件について、県教育委員会文化財課と文化財センターは、当局と協議を行った。その結果、施工範囲外は現状保存することを基本として実施設計を行い、必要な場合は、施工前に補足調査を行うことで合意した。これを受けて、墳丘調査については、南北方向のトレンチ調査に止め、東西方向については、残存面積などを考慮して掘削は行わなかった。石室内は、施工後に内部への立ち入りが不可能になることや、不測の事態などを考慮して全面調査を行ったが、解体は行わなかった。

なお、墳丘のトレンチは埋め戻しを行い(写真5)、石室については、安全上の観点から玄門部分を土嚢で塞いだ(写真6)。さらに、墳丘をブルーシートで覆い、現在に至っている。　(柴田)



第7図　施工範囲図 (1/300)

写真5　2号墳墳丘トレンチ埋め戻し状態 (南から)

写真6　2号墳石室埋め戻し状態 (西から)

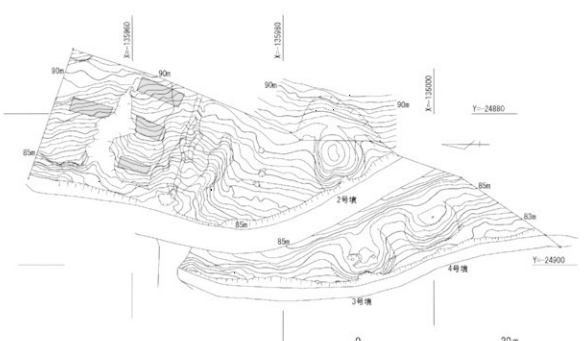
第３章　調査の概要

第１節　古墳群の概要

婦本路古墳群は、赤磐市弥上121-1ほかの山林に所在する。弥上地区は、大盛山山塊の西端にあたり、南は大森山、西を日古木丘陵に開まれた谷地形となっている。また、吉井川支流の小野田川に流れ込む可真川の上流部でもある。大盛山と大森山の山塊からは、大小さまざまな丘陵が派生しており、それぞれに多くの遺跡が分布している。本古墳群は、谷奥部にある不明瞭にのびる尾根上あるいはその西斜面に位置し、谷を臨むように形成されている。

ここは、赤磐市可真上地区から弥上地区を通り、岡山市東区瀬戸町万富へ抜ける現在の尾坂峠を起点として、北東へ直線で200ｍ程の位置である。各古墳は、谷を臨むように西斜面に築造され、現在では、万富・可真上地区をつなぐ道路が古墳群内を通過している。かつては、ごく近くに尾坂峠へ向かう古道があったということであり、この道路は、明治時代以降に、県が整備したものである。これは、現在、調査地の西方に大きく迂回して建設、供用されている県道可真上・万富停車場線の前身である。この谷は、熊山地域の中では、古墳時代後期の比較的大きな横穴式石室を有する前方後円墳や円墳が集中している特徴的な場所である（第３図）。

古墳群は、現在のところ、３基の古墳で構成されているようになっている。しかし、１号墳だけが、今回の調査地点にある２・３・４号墳から、北へ130ｍ離れた位置に築造されている（第６図）。このような実際の距離だけではなく、１号墳の立地が尾根筋上を指向する一方で、他は斜面部に築造されてい



第8図　掘削前地形図（1/500）

ることからも、同じ群としてとらえるべきか一考の余地があるといえる。また、5号墳についても、2・3・4号墳からは、南東へ60 m離れた斜面部に位置する。さらに、南110 mには、前方後円墳である弥上古墳が所在し、これもまた不明瞭ではあるが別の尾根筋上に築造されている。いずれの古墳も、墳丘がよく残存しており、石室が確認できるなど、踏査でも確認しやすい。

1号墳は、標高81 mに位置し、道路沿いにある墓地の東側に、墳丘と横穴式石室が確認できる。現状では、径14.5 m、高さ2 mほどの円墳と考えられる。石室内は、ほとんど埋没しているが、奥壁には1枚石が立てられている様子を見ることができ、石室幅は1.5 mを測る(写真7)。本古墳群内では、最も新しい時期の築造と推測され、規模は最大である。

一方、5号墳は、標高約97 mに位置する。道路からやや離れた位置に所在し、擁壁の北側に小さな高まりを確認できる。現状では径8 m、高さ0.5 mを測る円墳と推定され、埋葬施設は確認できない。3・4号墳のような竪穴式石室を有する古墳の可能性も考えられる。

2・3・4号墳は、標高83～87 mの西斜面に近接して築造されている(第8・10図)。2号墳が最も高い位置を占め、その西正面へ3 m下った地点に3号墳があり、この南に4号墳が並んでいる。古墳間の水平距離は、2・3号墳間で5 m、3・4号墳間で2.5 m程度である。

2号墳は、明治時代から昭和時代初期までの間に、群内を通るように建設された上記の道路によって、墳丘西側と石室羨道部が破壊されたようである。調査前には、石室は完全に埋没し、かろうじて、ずれて落ちかかった天井石のごく一部がのぞいていただけであった(写真8)。このような状態から、当初は、埋葬施設の種類についても判然としていなかった。また、横穴式石室であれば、石室内については攪乱を受けていない可能性も指摘された。しかし、調査が進展するにつれて、閉塞施設上部の石材が除去されていることや、そこから明治時代の陶磁器片が出土することなどが明らかになった。『改修赤幹部誌』(1940年初版)には、「餅形の敷石を残す、縣道の上に口を開く」と記載されており、調査結果は、その記述を裏付けることとなった。

3号墳は、墳丘の西側を用水路と農道によって削られていた。3号墳では、法面のかなり低い位置で石列の石がわずかに露出していたが、これについても、当初は、埋葬施設の一部かどうかなどについて判然としていなかった。調査開始直後には、3号墳の削平法面を清掃したが、埋葬施設が確認できないなどの不明な点もあった。また、3号墳の墳頂には、2か所の乱掘坑が認められたが、いずれも埋葬施設には到達していなかった。

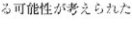
4号墳も、墳丘の西側を用水路と農道によって削られていた。この古墳では、乱掘坑は確認されなかっ

写真7　1号墳横穴式石室（北西から）

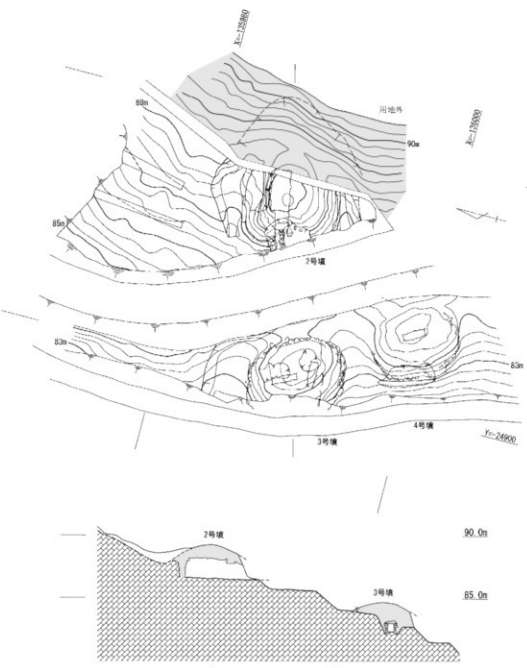
写真8　2号墳掘削前状態（南西から）

たが、墳丘の高さが他よりもかなり低いことから、墳丘上部が流失している可能性が考えられた。また、埋葬施設が他とは異なることも指摘されていた。

古墳に伴う遺物以外では、4号墳付近で出土した高台付杯１と近代以降の陶磁器などが出土している。また古墳以外の遺構は確認されなかった。なお、２号墳の北部には、流水などで抉られたような谷地形が複数認められ、その法面観察や、トレンチ調査を行った（第８図）。その結果、表土層直下で地山が確認されたが、遺構や遺物は認められなかった。（柴田）



第9図　古墳に伴わない遺物（1/4）



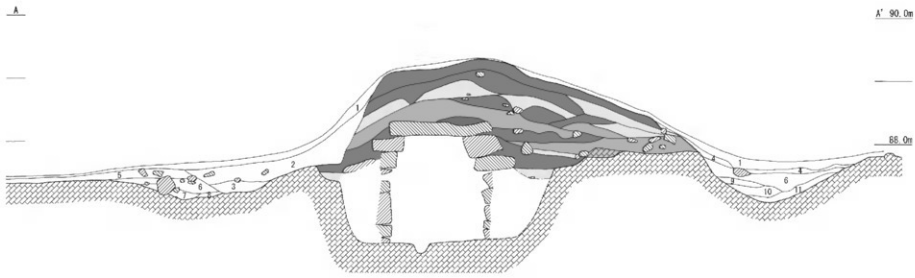
第10図　古墳群平面・断面図（1/300）

第２節　婦本路２号墳

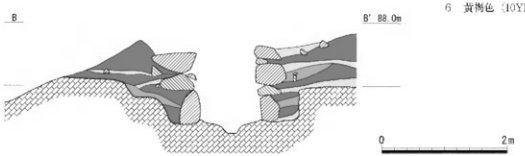
婦本路２号墳は、横穴式石室を埋葬施設とする円墳である。古墳は、標高 87 ｍの西斜面に築造され、石室は西に開口する。墳丘と周溝の西側部分は用地外にあり、現状での地形測量のみを行った。

墳丘や石室、石室床面などは、一部損壊を受けていたが、比較的良好な残存状態であった。床面には円礫が敷かれ、右側壁に沿って箱式石棺が確認された。石室は、やや小振りな石材で構築されており、石で蓋をした排水溝を伴う、整備されたものである。閉塞施設も残存していた。出土遺物は少ないが、当地域では、比較的古い時期の横穴式石室であることが判明した。（柴田）

第11図　墳丘平面図（1/150）



1　褐灰色（7.5YR4/1）砂質土《表土層》
2　黄褐色（10YR5/6）砂質土《撹乱土層》
3　褐色（10YR4/6）砂質土《撹乱土層》
4　黄褐色（10YR5/6）砂質土
5　明黄褐色（10YR6/6）砂質土
6　黄褐色（10YR5/6）砂質土（礫多含）
7　黄褐色（10YR5/6）砂質土（礫多含）
8　明褐色（7.5YR5/6）砂質土
9　明黄褐色（10YR6/6）砂質土
10　褐色（10YR4/6）砂質土
11　黄褐色（10YR5/6）砂質土



橙色（7.5YR6/8）砂質土《盛土》
褐灰色（7.5YR6/1）砂質土《盛土》
灰褐色（7.5YR6/2）砂質土《盛土》
褐灰色（7.5YR4/1）砂質土（段粒含）《築造時の表土層》

第12図　墳丘断面図（1/60）

1　墳丘と周溝（第11・12図、図版3・4－1～4）

2号墳は、西斜面に築造されており、墳丘の西側部分が用地内にかかっている。前面は、かつての道路建設によって、石室の一部とともに掘削を受け、特にその部分は大きくえぐれていた。墳丘北側の玄室付近についても、原因は不明であるが、大きく削り取られていた。なお、古墳の保存を行うことになったので、墳丘の調査は、南北方向のトレンチ調査による断面の記録に止めた。

古墳は、盛土および周溝で構成され、径8.0mの円墳と判断した。段築構造や、葺石・埴輪列などの外表施設は確認されなかった。墳丘の高さは、石室床面から2.9m、周溝底から2.3mを測る。

盛土は、橙色系と灰色系の砂質土を互層状に積み上げ、石室の上部は非常に硬くしまっているが、石室から離れた部分の盛土はしまりがない。墓壙よりも上の盛土は、厚さ20～30cm程度にしか分層できないが、石室壁面構築に伴う裏込土は、より細かく分けることができた。南側の盛土端付近で、小振りな角礫が多数確認されたが、密度は低く、列を形成するような状態ではなかった。

周溝は、地山を掘り込んだ幅1.7～2.7mの溝で、南北で確認された。深さは30～65cmを測る。現在の地形から、用地外の東側にも巡る可能性は高いが、西側には巡らないために、平面形は馬蹄形を呈する。周溝の北西部分の堆積土からは、須恵器甕の破片が出土している。（柴田）

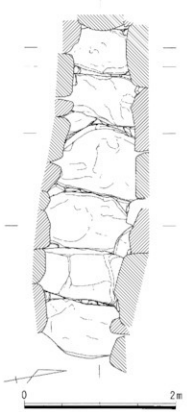
2　横穴式石室

石室構造（第13～17図、写真9～12、図版4－5・5・6）

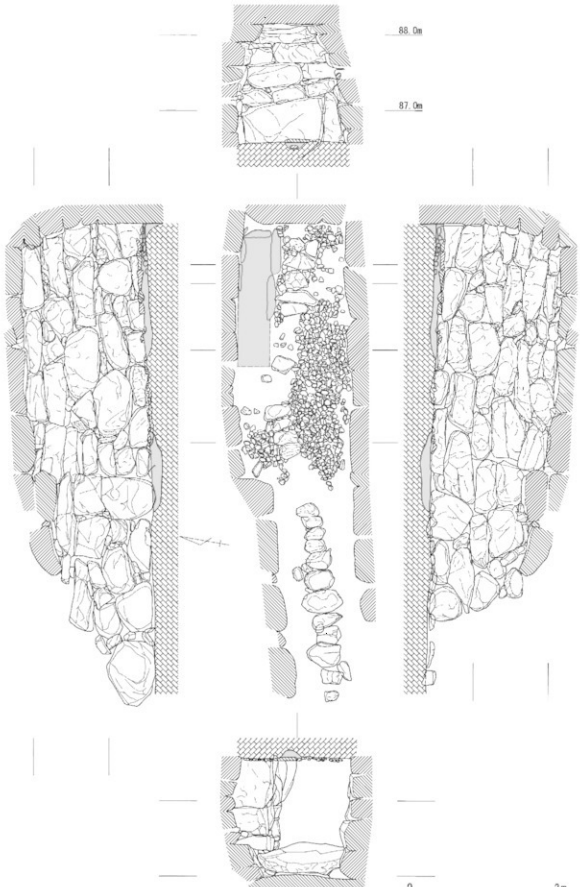
2号墳の埋葬施設は、西に開口する石片袖式の横穴式石室である。石室は、花崗岩の転石等で構築されている。石室左側壁のラインが、推定される墳丘の中心軸に当たると思われ、墳丘中心点は、奥壁から約2.5m西の左側壁上となる。玄室の主軸はN-80°-Eであるが、羨道はN-75°30′-Eとなり、ごくわずかではあるが、ズレが認められる。

石室全長は、現状で6.29m、玄室長は3.45m、玄室幅は奥壁部で1.36m、中央部で1.59m、玄門部付近で1.40m、玄室高は1.65mを測る。現状での羨道長は、右側壁で2.84m、羨道幅は玄門部で1.07m、中央部で1.00m、羨道高は1.25mを測る。

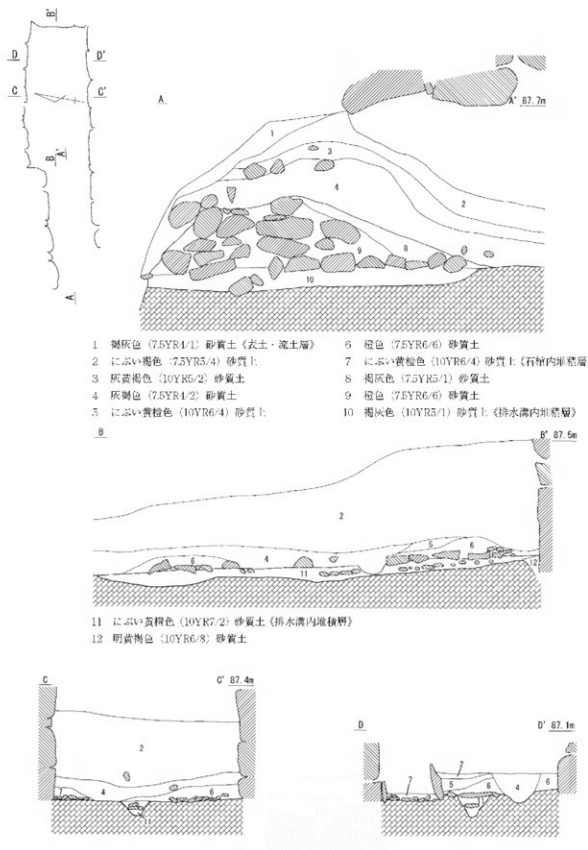
玄室の奥壁は5段積みで、基底石がやや大形である。側壁は右側壁で5段程度、左側壁で6～7段程度の石積みである。基底部から上部にかけて、ほぼ同じ大きさの石材を、目地を意識しながら積んでいる。右側壁の方が左側壁に比べ石材が大きく、その分段数も右側壁の方が少なくなっている。また、右側壁では、玄門部側1石分で縦方向の目地が認められ、その部分では石材がやや小振りで、側壁全体の横方向の目地と対応しない。側壁と袖部の調整をこの部分で行っていると考えられる。基底部から3段目までは垂直に積まれているが、上部に持送りが認められる。玄門部は袖石基底石が縦位に据えられ3段で構成される。羨道は4段程度の石積みであり、基底部の石材が他の石材に比



第13図　石室天井見上げ図（1/50）



第14図　横穴式石室（1/50）



1　褐灰色（7.5YR4/1）砂質土《表土・流土層》
2　にぶい褐色（7.5YR5/4）砂質土
3　灰黄褐色（10YR5/2）砂質土
4　灰褐色（7.5YR4/2）砂質土
5　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土
6　橙色（7.5YR6/6）砂質土
7　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土《石室内埋積層》
8　褐灰色（7.5YR5/1）砂質土
9　橙色（7.5YR6/6）砂質土
10　褐灰色（10YR5/1）砂質土《排水溝内埋積層》
11　にぶい黄橙色（10YR7/2）砂質土《排水溝内埋積層》
12　明黄褐色（10YR6/8）砂質土

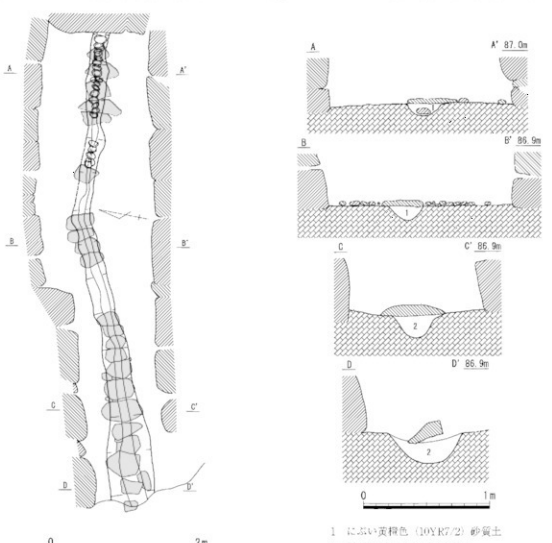
第15図　石室内土層断面図（1/30）

べてやや大きい。羨道左側壁では、玄室と羨道を区画する石材が縦位に据えられており、右側壁の玄門部袖石と対応する。また羨道先端が削平を受けており、開口部の状況はやや不明瞭である。天井石は玄室で４石、羨道で２石が認められる。前壁は天井石１石分であり、前壁高も30㎝程度と低い。

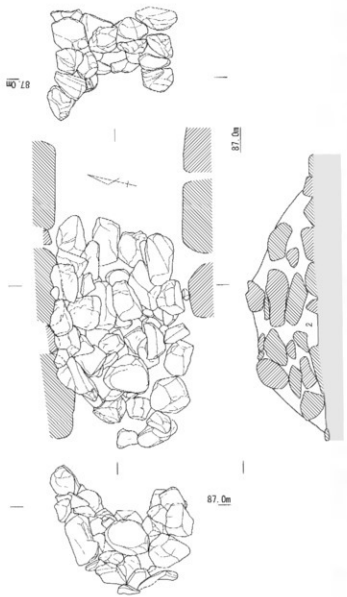
石室床面には奥壁北隅に箱式石棺が残存し、玄室床面には径５～10㎝程度の小円礫が敷き詰められていた。また、玄室床面は奥壁から入口にむかって20㎝程度低くなっている。

玄室中央部奥壁付近から羨道部にかけては排水溝が認められる。排水溝は幅20～30㎝の素掘りの溝に石蓋を伴う。羨道先端部においては溝の幅が60㎝となっており、開口部に向ってやや広がっている。また、奥壁から180㎝までは、溝の底部に小円礫が敷かれている。箱式石棺、玄室礫敷、排水溝は乱掘によって部分的に破壊は受けているもののおおむね良好に残存する。

閉塞施設は羨道先端付近に位置し、長さ190㎝、高さ90㎝が残存していた。乱掘によって一部破壊を受けているものの、おおむね良好に残存しており４段以上の石積みが確認できる。閉塞石は石室の長軸方向に合わせるように縦方向に並べながら積む意図が読み取れた。さらに閉塞石は全体を山状に積み上げるというよりは、玄室側は垂直に近い傾斜で積み上げられていたと考えられる。ただし開口部側に関しては、部分的に破壊を受けているため定かではない。また閉塞石の間に砂質土を詰めなが



第16図　排水溝(1/50･1/30)



1　灰褐色（7.5YR4/2）砂質土（炭粒、陶磁器片含）
2　橙色（7.5YR6/6）砂質土
3　にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土
　灰色（10YR5/1）砂質土（溝水溝内堆積層）

第17図　閉塞施設（1/30）

写真9　閉塞施設①（最下部・西から）

写真10　閉塞施設②（南西から）

写真11　閉塞施設③（西から）

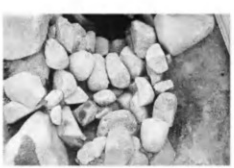


写真12　閉塞施設④（最上部・西から）

ら構築しているが、意図的に粘土などを使用した痕跡は認められなかった。

前述の通り石室内部は乱掘を受けており、以前は石室が開口していたようである。そのため石室内部がかなりの流入土で埋まっており、奥壁部では90㎝程度砂質土が堆積していた。特に褐色系の砂質土である1～4層は、乱掘以降の流入土であり、比較的新しいものと考えられる。（笹栗拓）

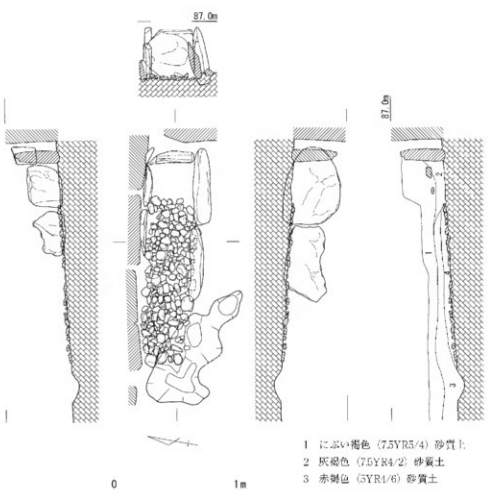
箱式石棺（第18図、図版4－5）

玄室奥壁隅で箱式石棺を1基検出した。箱式石棺は、奥壁北隅に寄せられるように配置されている。石棺は内法で長さ170㎝（推定）、幅36㎝、高さ34㎝を測る。奥壁側の小口と両側壁の奥壁側から2石分は残存しているが、その他は乱掘によって抜き取られている。抜き取り痕から北側の長側辺は4石、南側は3石で構成されていたものと考えられる。石棺の床面は、石室床面と同様に小円礫で敷き詰められている。ただし奥壁側から35㎝の範囲で円礫が抜き取られている。（笹栗）

遺物出土状態（第19図、図版4－5）

調査開始時、石室内には、床面から95㎝ほどの厚さで流入土が堆積していた。それに加え、石室および箱式石棺は、床面まで攪乱が及んでいた。床面の出土遺物はもとより、流入土などからの出土遺物もかなり少ないことから、当初から石室内の遺物は少なかった可能性が高い。

玄室内では、土師器壺11や大刀M1が、流入土層の最上部から出土した。大刀は、散乱した状態であった。この層では、他にも須恵器の杯身3、壺4、短頸壺6、脚付長頸壺7の胴部、土師器小片や耳



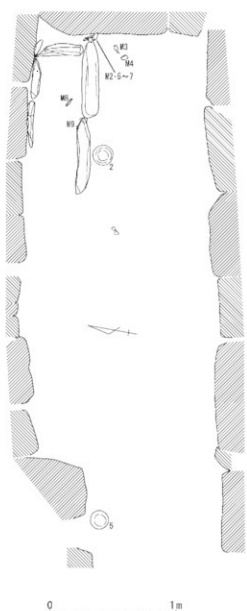
第18図　箱式石棺（1/30）

環M10、石棺か排水溝蓋石などの可能性がある石材も出土した。羨道部の流入土からは土師器直口壺10、閉塞施設前面の流入土からは須恵器甕8・9が出土した。この甕は、石室外の墳丘に置かれたものが転落した可能性が高い。北側の周溝からも、これらと同一個体とみられる須恵器甕の破片が出土している。石室内の流入土は、洗浄しながらふるいにかけたが、玉類は皆無であった。

玄室内の脚付長頸壺7の口縁部は、3号墳の表土から出土した。また、図示していないが、石室外の表土中で、子持高杯の脚台部の可能性がある小片が確認された。これが、3号墳盛土中の27と同一個体かどうかは不明であるが、3号墳盛土の出土遺物が、2号墳に伴う可能性があるといえる。

玄室内の床面では、箱式石棺周辺で遺物の出土が確認できた。奥壁と石棺南側板の間からは、鉄鏃M2・5～7が、先を下に向けてまとまって出土した。この南のM3・4も、本来は同じ場所に置かれていた可能性がある。石棺外の南では、須恵器杯身2が、口縁部を下にして出土した。これは、杯身3とともに土器枕として使用された可能性もあり、そうであれば、本来は石棺内に置かれたものである。羨道の床面では、袖石寄りに須恵器短頸壺5が、口縁部を下にして出土した。

箱式石棺の床面では、刀子M8、耳環M9が出土した。M8の茎部は石棺外から出土しており、M9と対になる可能性のあるM10も流入土からの出土であることから、石棺内の遺物は埋葬当初の位置を止めている可能性は低い。（柴田）



第19図　石室内遺物出土状態（1/30）

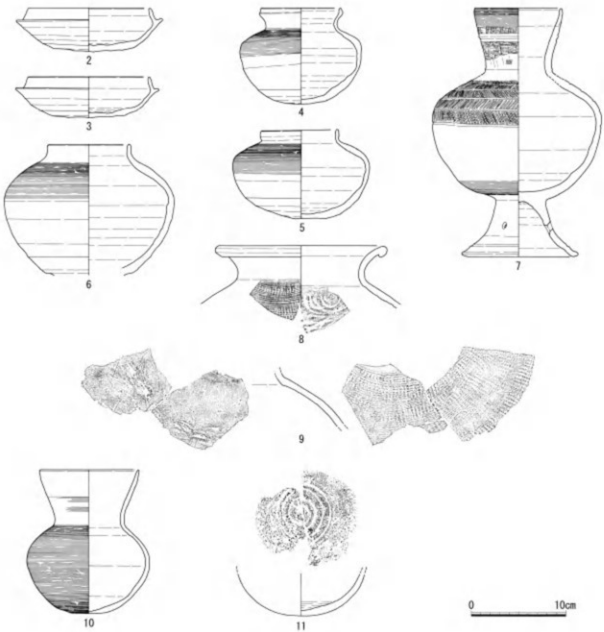
3　出土遺物

土器（第20図、図版7）

須恵器8点（杯身2点・壺1点・短頸壺2点・脚付長頸壺1点・甕2点）と土師器壺2点を図示した。

杯身2・3は、口縁部の立ち上がりが長くのび、底部外面は平らに整形されている。両者の口径と器高はほぼ同じである。胎土に、比較的砂粒が多く認められる点が特徴的である。壺4と短頸壺5・6は、肩部にカキメが施され、体部下半部にはヘラケズリが施される。5・6の焼成は堅緻であるが、4の焼成は悪い。また、短く屈曲して上にのびる口縁端部が特徴的である。脚付長頸壺7は、口縁部が内湾し、肩部の張りが丸味を持つが、頸部から肩部の文様構成や脚形態は3号墳の18と酷似している。甕8は灰色を呈するが、9は暗灰色を呈する。

土師器では、直口壺10と壺11が出土した。どちらとも、須恵器の技法が認められる。10は、外面全体にカキメが施されており、頸部内面と胴部外面の一部にベンガラが残存する。11は、底部内面に同心円の



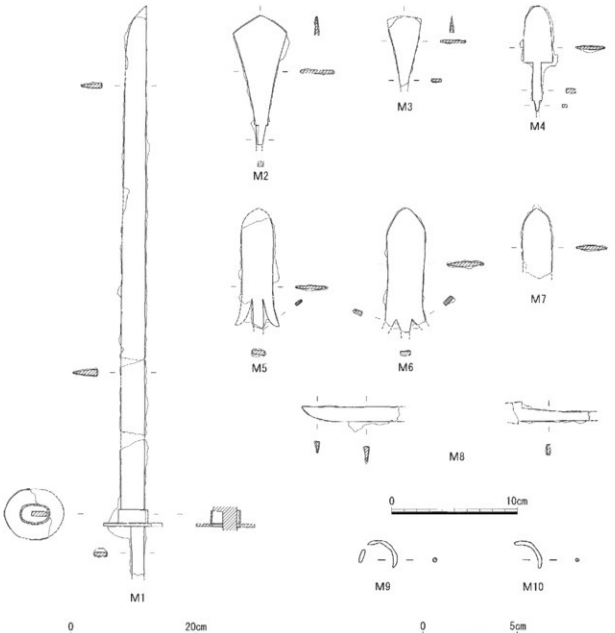
第20図　出土遺物①（1/4）

当て具痕跡がみられる。（柴田）

金属器（第21図、図版7）

武器7点（大刀1点、鉄鏃6点）と、工具1点（刀子）、装身具2点（耳環）を図示した。

大刀M1は3つの破片で、接合はできなかったが、同一個体と考えた。片関で、鎺と楕円形を呈する鍔が残存している。鍔の断面は、外縁部がわずかに厚くなる。レントゲン写真でも、透かしなどの装飾は認められなかった。鉄鏃はいずれも平根鏃で、点数こそ少ないが、さまざまな形式（十頭式M2・方頭式M3・二角形式M4・腸抉柳葉式M5～7）が認められる。刀子M8は接合しないが、同一個体と考えた。両関で、茎部にわずかに木質が付着する。M9・10は、耳環の芯と考えられる。（柴田）



第21図　出土遺物②（1/6・1/3・1/2）

4　小結

婦本路2号墳は、小規模な円墳であるが、排水溝を伴う横穴式石室を有する。石室石材は小振りで、付近に所在する弥上古墳や畑古墳と比べると古い様相を示す。玄室平面形は、長方形を呈し、奥壁幅と玄室長の比率はおよそ1：2.5である。袖位置は異なるが、畑古墳がほぼ同じ数値を示す。

石室内部には、箱式石棺1基が構築されているが、他に埋葬が行われた痕跡は確認できなかった。奥壁と石棺の間から出土した鉄鏃は、4種類の平根鏃のみで、他に長頸鏃は確認されなかった。

出土遺物が極めて少ないことから、築造時期を判断することは困難である。2点の杯身はTK10型式に相当するとみられるが、築造時期の上限を示すにすぎない。3・4号墳や弥上古墳・畑古墳との遺物・石室構造の比較からすると、築造時期は、TK43型式並行期の可能性が高いと考えられる。　（柴田）

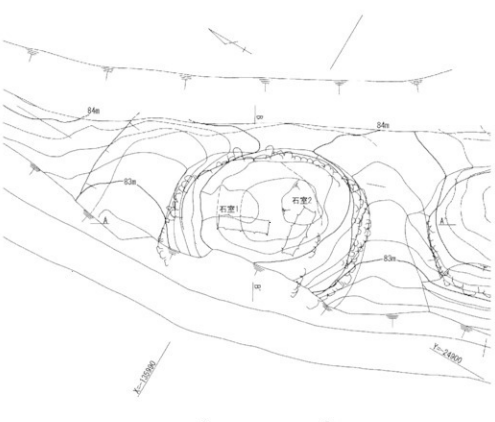
第３節　婦本路３号墳

婦本路３号墳は、竪穴式石室を埋葬施設とする円墳である。古墳は、標高 83 m の西斜面、２号墳の西に築造されている。墳丘の西側は、農道等によって削られており、墳丘裾を巡る石列の１石がわずかに露出していた。埋葬施設として２基の竪穴式石室が確認され、２基目の構築に際して墳丘を拡張していることが明らかになった。墳丘頂部には乱掘坑が認められたが、石室はいずれも攪乱を受けておらず、埋葬時の状態が良好に残存していた。（柴田）

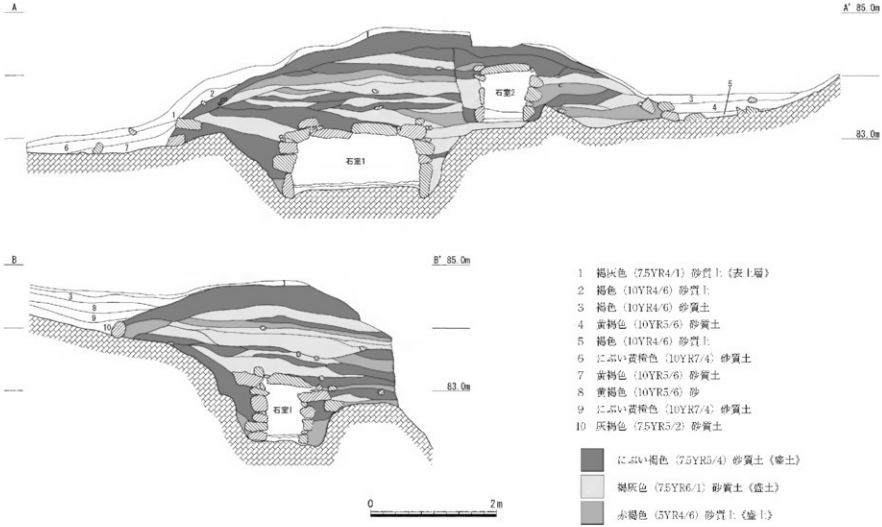
１　墳丘と周溝（第 22 ～ 24 図、図版３・８・９）

古墳は、盛土および周溝で構成され、墳裾となる盛土端には石列が施されている。この石列は、盛土の基礎と考えられ、その補強や流失防止の機能とともに、外側に向いた面が露出していた可能性が高いことから、一定の装飾的効果も想定される。また、盛土断面や石列の状態などから、墳丘の南側を拡張していることが判明した。当初の古墳は、径 6.1 m の円墳であるが、拡張時には南北 8.4 m となり、楕円形を呈する。墳丘の高さは、石列西端から見ると 2.3 m 以上である。

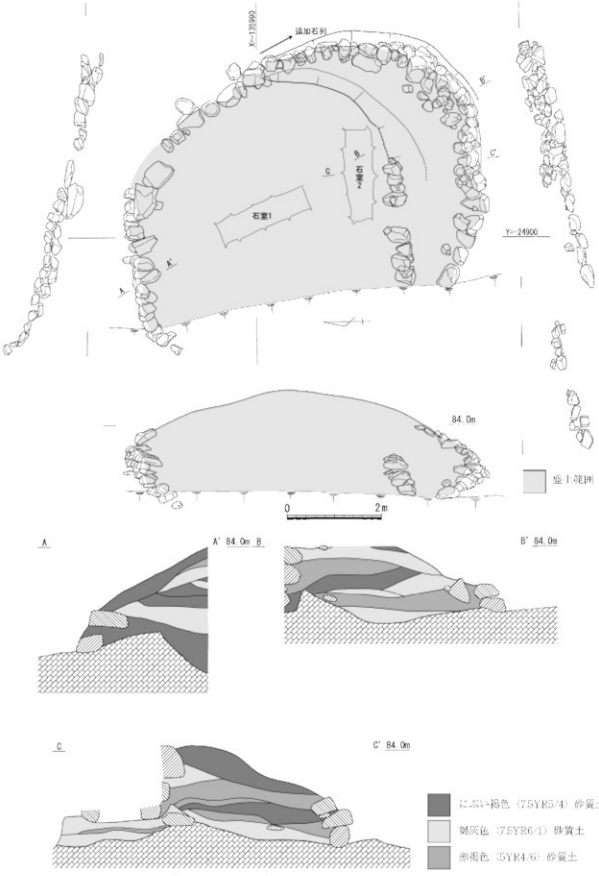
盛土は、橙色系と灰色系の砂質土を互層状に積み上げている。竪穴式石室１の西側部分の盛土は、比較的薄く分層できる上に、硬くしまっており、谷部に対して人念に盛土が行われたことがわかる。盛土の最上層は、厚さ 30 ～ 40 cm を測り、古墳全体を覆っている。断面観察では、竪穴式石室２の構



第22図　墳丘平面図 (1/150)



第23図　墳丘断面図（1/60）



第24図　石列（1/80・1/40）

築後に、この盛土が施されたように見られたが、上層の区別は困難であった。竪穴式石室2の構築では、墳丘中心側を大きく掘削し、北側は主に石室を構築しながら盛土を施している。拡張に伴う盛土内部、石室2の南西部からは石製紡錘車S13、同じ墳裾近くからは、器台28が出土した。石室2の北東部分からは、復元および図示できなかったが、土師器片も出土した。

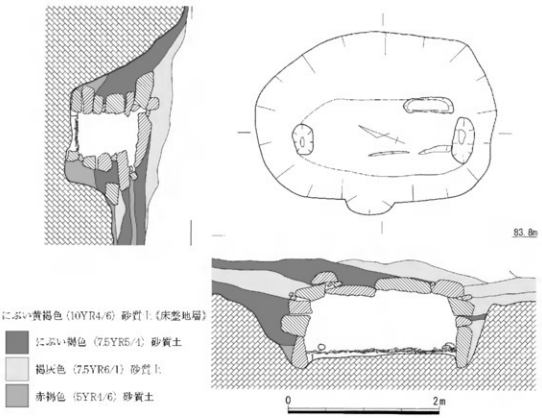
当初の石列は、南東部と西側部分が失われているが、平面形で六角形を呈する。これは、築造工程の単位と考えられ、一辺の長さは、約3.2～3.6 mを測る。小口を外に向け、地山上に自然石を1～2段程度積み上げている。南東辺の石列は、竪穴式石室2の構築時に除去され、西の角からあらためて追加されている。拡張時の石列は、当初の周溝外側までひろがり、自然石が3段程度積み上げられている。2・3段目の石はやや小振りである。平面形は、当初とは異なり、比較的円滑な弧を描く。

周溝は、当初の墳丘には伴うが、拡張時には掘削されなかった可能性がある。南側の周溝は、最大幅2.16 m、深さ30 cmを測り、拡張時の盛土下で検出された。この溝は、東角付近でなくなり、山側を別に溝が巡るかどうかは不明である。北側では、幅4.5 mを測る浅い皿状の溝が確認できるが、墳丘側の部分については、幅90 cm程度が盛土で覆われている。古墳の南西部で、子持高杯27や甕26が出土しているが、既述した拡張時の盛土内部から流出した可能性も考えられる。（柴田）

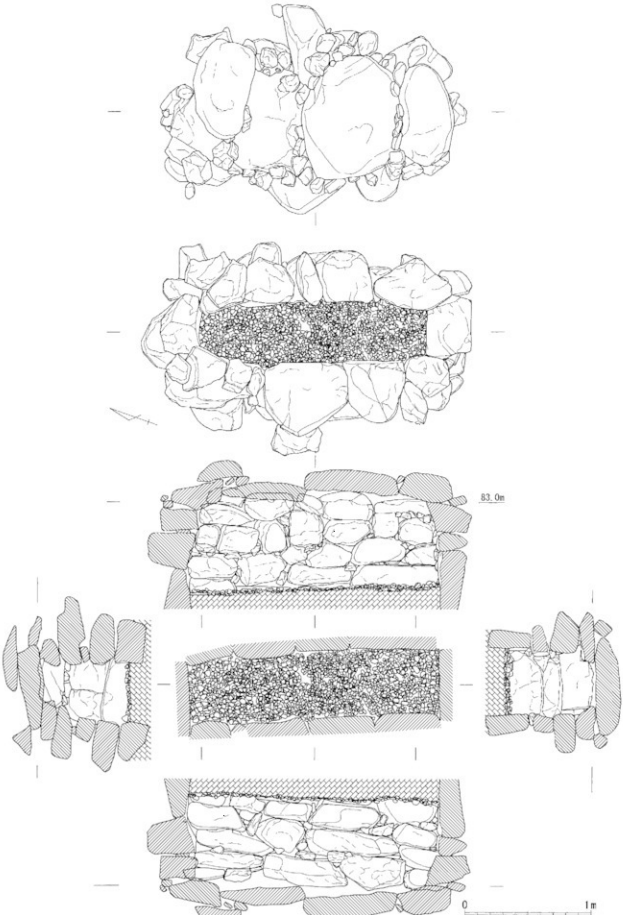
2　竪穴式石室

竪穴式石室1（第25～28図、図版10）

竪穴式石室1は、3号墳の中心埋葬施設と考えられる。石室掘り方は、南北方向に長い楕円形を呈する。長さは318 cm、幅は225 cm、深さは80 cmを測り、地山を深く掘削して竪穴式石室が構築されている。



第25図　石室1掘り方・土層断面図（1/50）

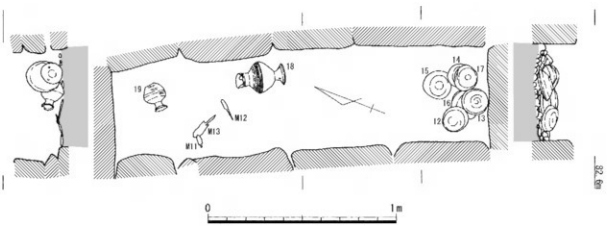


第26図　竪穴式石室1(1/30)

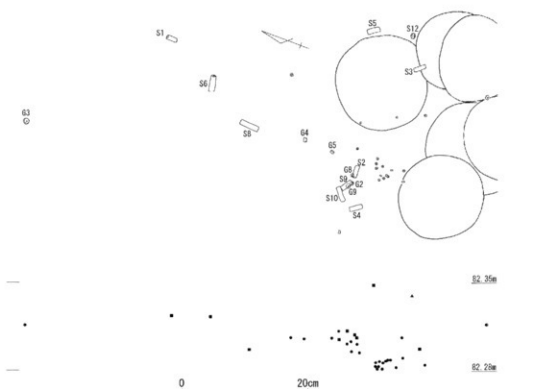
特に南北の小口部分は、深く掘り込んで石を据えている。

石室は、花崗岩の転石等で構築されている。石室主軸はN-23°30′-Wで、石室長199㎝、幅53㎝、高さ76㎝を測る。石室壁面は、小口が3段積み、側壁は3段積みで部分的に4段積みの箇所が認められる。両小口の基底石は、縦方向に据えられているが、上段ないしは側壁石材は控えをもって横長手積みされている。また南小口の3段目の石材には、L字状の加工が施され、側壁石材と奥壁を組み合わせている。天井石は4石で、隙間に小振りな石材を詰めている。石室床面には、2号墳の床面と同様に径5㎝大の小円礫を敷き詰めている。

床面の円礫上では、原位置を保った状態で須恵器・鉄鏃・玉類が出土した。須恵器は南小口付近に



第27図　石室1遺物出土状態 (1/20)



第28図　玉類出土状態 (1/6)

※垂直方向の縮尺は1/3　■管玉　▲算盤玉　●ガラス玉

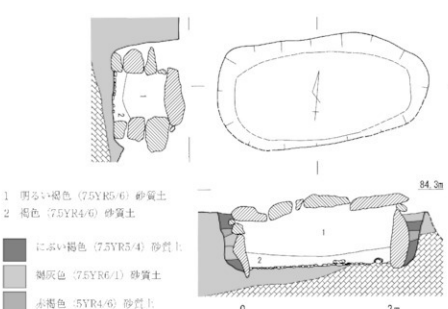
杯蓋と杯身が、それぞれ伏せた状態で重ねて並べられており、枕としての機能を果たしていたと考えられる。石室中央からやや北側、東側壁に沿う位置には脚付長頸壺18が、北小口付近に瓶19が置かれていた。杯の出土状態から枕の機能が考えられること、また南小口の床面が北小口に比べ５㎝程度高い点から南側が頭部、北側が足元であった可能性が高い。また壺は、それぞれ口縁部が打ち欠かれており、損壊後に供えられていたものと考えられる。鉄鏃は石室中央からやや北側で３点出土している。玉類は杯のやや北側付近にまとまって出土しており、頭飾りとしての機能を果たしていたと考えられるが、その配列について復元することは困難である。（笹栗）

竪穴式石室２（第29～31図、図版11）

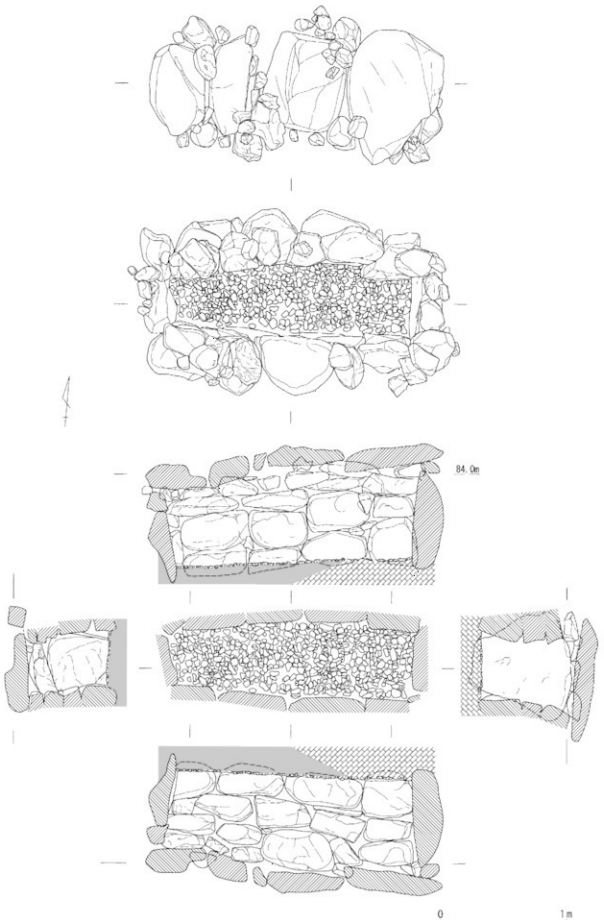
竪穴式石室２は、竪穴式石室１に伴う墳丘構築以降に新たに増設された埋葬施設であると考えられる。石室１に対して主軸が70°ずれており、床面のレベルも石室２の方が100㎝高い。石室掘り方は、東西方向に長い楕円形を呈する。長さは280㎝、幅は160㎝、深さは68㎝を測り、墳丘盛土と東側小口と、そこから南側で地山を掘削して掘り込まれている。

石室は、花崗岩の転石等で構築されている。石室主軸はN-86°30′-Eで、石室長195㎝、幅60㎝、高さ77㎝を測る。石室は、東小口が縦位に据えられた一枚石で、西側小口についても基底部が大形石材を使用した２段積みである。側壁は３段程度の石積みで、横長手積みが基本である。小口に大形の石材を使用することは、石室１と異なり、横穴式石室の石材大形化の流れと対応してくる可能性がある。天井石は４石で、隙間に小振りな石材を詰めている。石室床面には、石室１と同様に径５㎝大の小円礫が敷き詰められている。

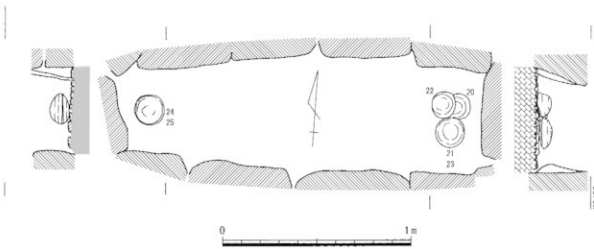
床面の円礫上には、原位置を保った状態で須恵器が出土した。須恵器は、東小口付近に杯蓋と杯身が２セット伏せた状態で並べられ、石室１と同様に枕の機能を果たしていたと考えられる。西小口付近には、杯蓋・杯身のセットが置かれていた。遺物の出土状態や床面のレベル差などから東側が頭部、西側が足元であった可能性が高い。石室２の方が、石室１に比べ副葬品が簡素であるものの、ほぼ同様の遺物配置をとっている点は注目される。（笹栗）



第29図　石室2掘り方・土層断面図（1/50）



第30図　竪穴式石室2 (1/30)



第31図　石室2遺物出土状態 (1/20)

3　出土遺物

竪穴式石室 1

土器（第32図、図版12）

須恵器8点（杯蓋3点・杯身3点・脚付長頸壺1点・瓶1点）を図示した。

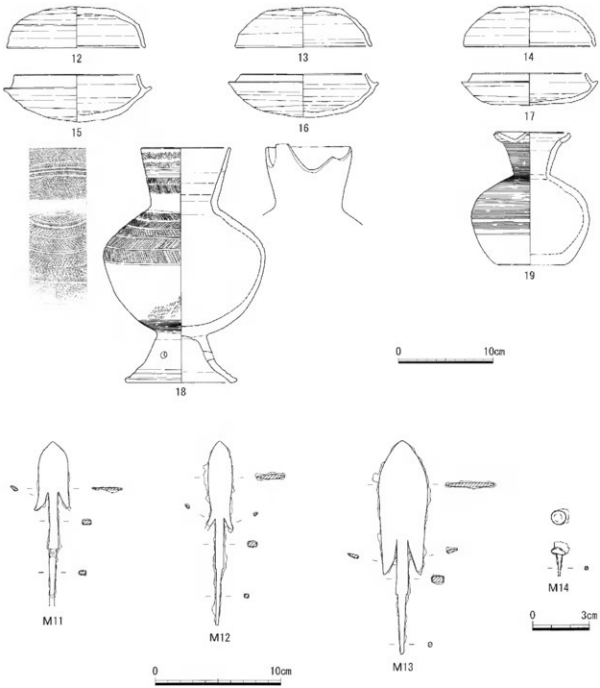
杯蓋は、天井部と体部の境に鈍い稜がある12と、稜の無い13・14がある。後者の天井部は、ヘラケズリにより平らに整形されている。12や14の口縁部端部は面を形成する。口径は14㎝前後、器高は4.3㎝前後である。12の口縁部は磨耗し、14では3か所の欠損が認められる。これらは、土器の使用に関わるものと推測される。杯身には、口径13㎝程度・器高4.6～5㎝で、口縁部が長くのびる15・16と、小振りで扁平な17がある。前二者の底部は、丸味をおびる。後者の焼成は、他と比べて非常に堅緻で、特徴的である。脚付長頸壺18は、口縁部がまっすぐのび、口縁外面上半には粗雑な波状文が施される。肩部の張りがやや強いが、頸部から肩部の文様構成や脚形態は2号墳の7と酷似する。瓶19は、丸い体部にラッパ状の口頸が取り付く。18・19に認められる口縁部の欠損は、意図的に損壊が行われた可能性が高く、端部内側（上方）からの打撃によるものである。（柴田）

金属器（第32図、図版12）

鉄鏃3点と鋲1点を図示した。鉄鏃は、すべて腸抉柳葉式の平根鏃であるが、鏃身の大きさや形態が異なる。M11は鏃身が短く、M12の鏃身幅は頸部近くが細くなる。どちらとも、逆棘が外側へ反っている。M13は大形で、逆棘がまっすぐのびる。M14は、長さ11.87㎜の鋲である。頭部は円形で、中央部が丸く盛り上がる。（柴田）

玉（第33図、巻頭図版2、図版12）

管玉10点、切子玉1点、算盤玉1点、ガラス玉51点を図示したが、ガラス玉は、他にも2点以上ある。石製の玉組成は管玉主体で、4号墳との相違が顕著である。また、算盤玉S12と切子玉S11は、同じくらいの大きさで、4号墳の切子玉よりも小さい。径5㎜を超えるガラス小玉G1～9の多くは、濃青色系であるが、G8・9は、比較的薄い青系である。径3～4㎜程度のガラス小玉G10～51の多くは、青緑色を呈するが、G46～51は濃青色～薄青色系の発色である。ガラス小玉の大小でみた組成も4号



第32図　石室1出土遺物①（1/4・1/3・1/2）

墳とは対照的である。（柴田）

竪穴式石室2

土器（第34図、図版13）

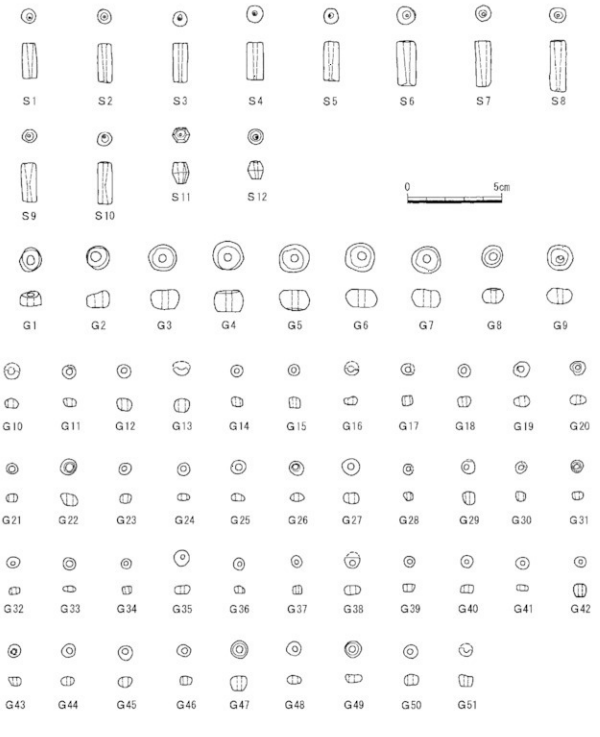
須恵器6点（杯蓋3点・杯身3点）を図示した。24と25は、組み合わせた状態で出土した。杯蓋は、天井部が丸味をおびる。20・24の口縁端部は丸くおさまるが、21の口縁端部には面が形成されている。なお、21は、口縁部1か所が欠損している。杯身は、立ち上がりが短く、底部は丸味をおびる。23の外面のヘラケズリは比較的粗く、ごくわずかであるが中心部に及ばない。また、22の口縁部には、磨

耗が認められる。これは、土器の使用によるものと推測される。（柴田）

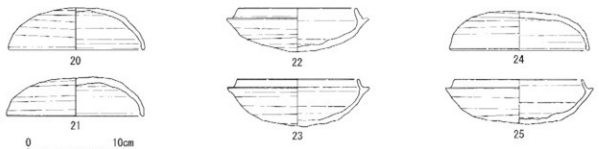
周溝および盛土内

土器（第35図、図版13）

須恵器３点（子持高杯１点・器台１点・甕１点）を図示した。甕26は、焼成が比較的悪く、同一個



第33図　石室1出土遺物②（1/2・1/1）

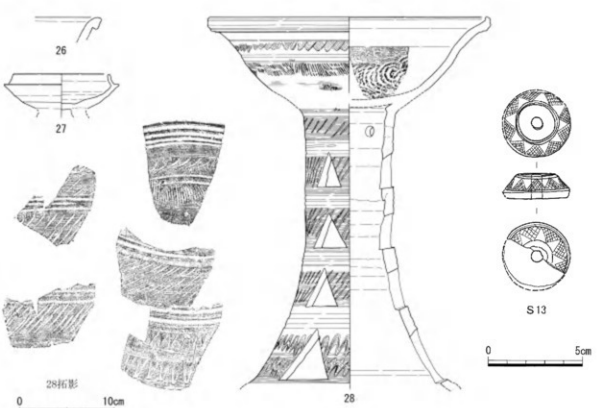


第34図　石室2出土遺物 (1/4)

体と考えられる胴部片が、石室2内の流入土から出土している。子持高杯 **27** は、口径10㎝、器高は3.8㎝を測る。底部に幅1.6㎝で、外径4.9㎝の剥離面が確認できる。器台 **28** は、接合できない4つの破片について、すべて同一個体として復元したものである。受部下半の内面には、同心円文の当て具痕、外面には平行タタキが認められる。筒部の最上段には、3方向に円形の透かしが施され、以下の段には、3方向に三角形の透かしが施されている。両者は位置をずらしている。（柴田）

石製品（第35図、図版13）

S13 は、石室2の西小口付近の盛土内から出土した滑石製紡錘車である。底径は35.37㎜、上端面の径は20.90㎜、高さは13.58㎜を測る。径5.87㎜の穿孔が施されており、上面には、2条の圏線が内側に、外側に9つの鋸歯文が描かれている。下面の半分は欠損しているが、2条の圏線が内側に、3つの鋸歯文が外側に確認できる。（柴田）



第35図　墳丘外および盛土内の出土遺物 (1/4・1/2)

4　小結

婦本路３号墳は、竪穴式石室による埋葬が２回行われた円墳である。当初の墳丘規模は、径 6.1 mで、竪穴式石室１がほぼ中心に構築されている。次に、竪穴式石室２の構築に伴って、墳丘南側を拡張することで、最終的な墳丘規模は径 8.4 mとなっている。墳丘の盛土に際しては、墳裾に石列が巡り、拡張時にはその一部を除去しながら再度石列を施していることが明らかになった。

石室２は、石室１とは位置をずらし、さらに方向も変えている。両石室の規模はあまり変わらないが、石室１の壁面の方が端正に仕上がっており、床面には、小さな円礫を密に敷き詰めている。出土遺物でも、石室１の方が、土師をはじめとして種類が豊富である。しかし、須恵器を枕に転用し、足元に杯や壺などを置く点については、４号墳も含めて共通している。なお、石室１の玉類の組成は、４号墳と対照的で、時期差と考えられる。

石室１の須恵器は、TK10 型式新相に相当するものを含み、これが築造時期の上限を示す可能性がある。石室２の須恵器は、TK43 型式に相当し、これを拡張時期の上限に当てることができる。（柴田）

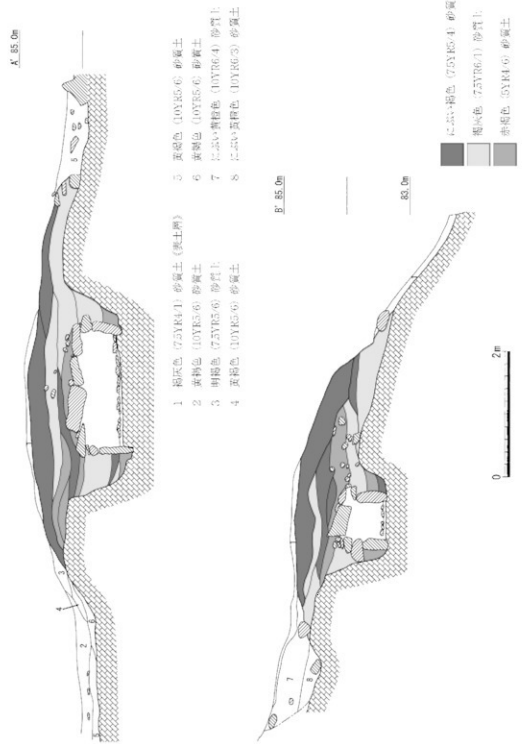
第４節　婦本路４号墳

４号墳も標高 84 m程の西斜面上に築かれている。現状では、数 10 cm程のわずかな盛り上がりが径６～７mの範囲で確認できるのみである。古墳は、２号墳から南へ５m程に位置し、北西側の３号墳に接するように築かれている。墳形はやや南北方向に長い楕円形を呈している。（内藤善史）

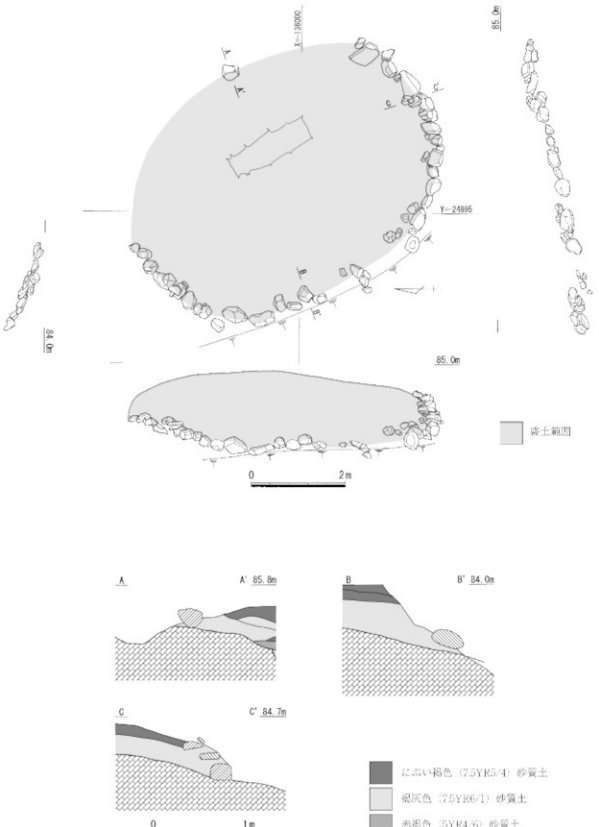
第36図　墳丘平面図 (1/150)

1　墳丘と周溝（第36～38図、写真13、図版3・14）

墳丘の盛土は、南北7m、東西6m程の範囲に確認された。盛土の厚さは斜面上部で20cm、斜面下部では150cmにおよび、墳丘中央部である石室の天井石の上では50～60cmを測る。



第37図　墳丘断面図（1/60）



第38図　石列（1/80・1/40）

盛土は大きく3層に分かれ、地山直上の最下部に赤褐色砂質土が、その上に褐灰色砂質土が盛られ、一番上はにぶい褐色砂質土で覆われている。中間の褐灰色砂質土中には比較的多くの角礫の混入が認められ、墳丘の裾部には石列が巡らされている。石列は、一抱え程の大きさの石を多用し、古墳の前面にあたる西側を中心として墳丘の北西から南東部にかけて確認された。検出された石列の大半は1段であるが、南部や北西部の一部では2～3段の石積みが認められる。また、墳丘の外側を巡る溝の埋土などからは、転落した積み石と考えられる一抱え大の石が多く出土し、墳端部を巡る石列は2～3段積まれていた可能性がある。

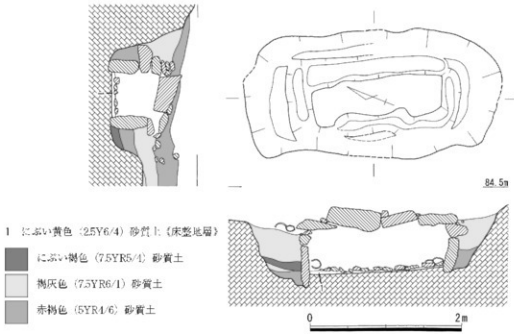
周溝は、南側から東側の墳端部に巡らされた石列の外側で、幅150cm、深さ35cmを測る溝が検出された。埋土は黄褐色やにぶい黄橙色の砂質土である。北側は墳端部から北西に隣接する3号墳の端部まで下がりが一体化して幅2m以上におよんでいるが、溝状を呈し深さ30cm程を測る。埋土は黄褐色および明褐色の砂質土が堆積し、3号墳の周溝との共用が考えられる。なお、墳端部からそのまま急斜面部に移行している墳丘の内側では、溝を検出することはできなかった。（内藤）

写真13　盛土内の石（石室奥・東から）

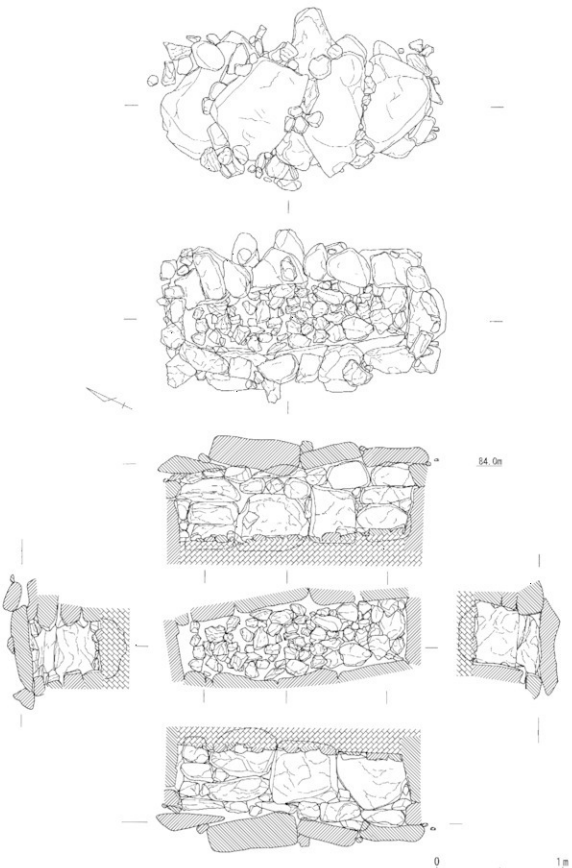
2　竪穴式石室

竪穴式石室（第39～43図、図版15）

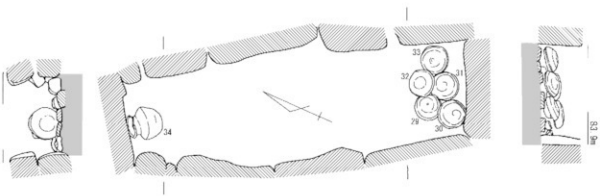
4号墳には、竪穴式石室が1基構築されている。石室掘り方は、南北方向に長い楕円形を呈するが、3号墳の二つの石室に比べてやや長方形に近い。長さは343cm、幅は170cm、深さは67cmを測り、地



第39図　石室掘り方・土層断面図（1/50）



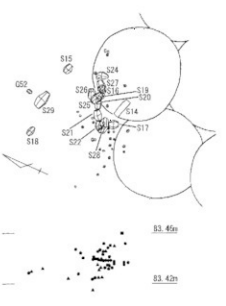
第40図　竪穴式石室 (1/30)



第41図　石室内遺物出土状態 (1/20)

山を掘削して竪穴式石室を構築している。

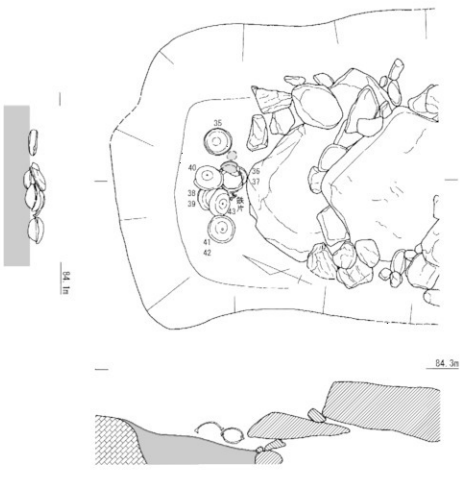
石室は、花崗岩の転石等で構築されている。石室主軸はN-30°-Wで、石室長は182㎝、幅は59㎝、高さは53㎝を測り、3号墳の石室1・石室2に比べるとやや規模が小さい。石室は、小口・側壁ともに基底部に大形の石材を据え、上段を横長手積みされており、2ないしは3段積みである。天井石は4枚で、隙間に小振りな石材を詰めているが、粘質土を用いるなどの特別な処置は行われていない。石室床面には、10～20㎝大の花崗岩割石が敷き詰められている。敷石を伴うという点では、3号墳の石室と共通するものの、やや異なった様相をもつ。



第42図　玉類出土状態 (1/6)
※垂直方向の縮尺は1/3
■管玉　▲切子玉　●ガラス玉

床面の敷石上には、原位置を保った状態で須恵器・玉類が出土した。須恵器は、南小口付近で杯蓋と杯身が出土している。それぞれ2点・3点の計5点が伏せられた状態で並べられていた。西小口付近では、壺が口縁部を打ち欠いた状態で置かれており、3号墳の石室1・石室2と同様の配置をとっており注目される。南側の杯身・杯蓋の出土状況から枕の機能が考えられる点や、床面のレベルは南側が10㎝高い点から、南側が頭部、北側が足元であった可能性が高い。また、玉類は杯の北側付近を中心にまとまって出土している。この一部で、切子玉が連接した状態で出土しており、配列状況が復元できる。東からS24・S16・S19・S20・S21・S22がそれである。これらは、頭飾りとして機能していたものと考えられる。

また石室外では、天井石の北端に接する状態で、須恵器の杯身・杯蓋と不明鉄器がまとまって出土している。杯蓋が4点、杯身が5点出土しており、天井石を据えた後に供献したと考えられる。35と36の間の上にはベンガラが染み込み、割れてずれた36の破片のみがベンガラで染まっている。(笹栗)



第43図　石室外遺物出土状態 (1/20)

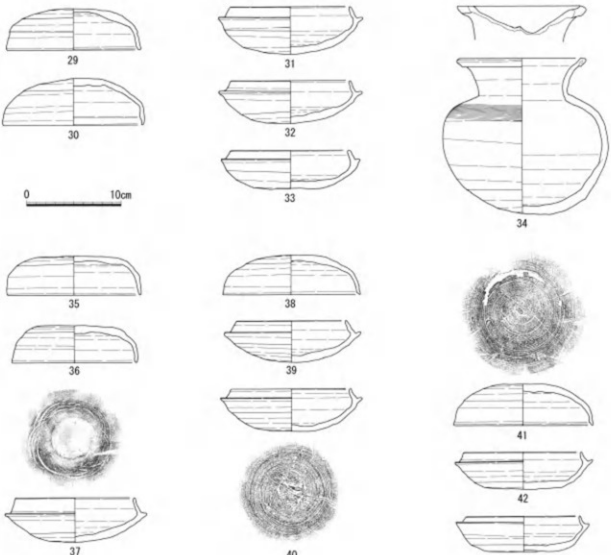
3　出土遺物

土器（第44図、図版16）

石室内の須恵器については、6点（杯蓋2点・杯身3点・壺1点）すべてを図示した。

杯蓋には、口縁部と体部との境に稜がある29と、境が不明瞭な30がある。前者の口縁端部には面が形成され、後者では強いナデによって凹んだ面が認められる。杯身31・32は、口径12.5㎝程度、器高4.5～5㎝で、口縁部が長くのび、底部は丸味をおびる。杯身33は、口縁部がやや短く、厚みがあり、底部は扁平である。この焼成は、他と比べて非常に堅緻で、特徴的である。29・31・32の口縁部には磨耗が認められ、29では2か所の欠損、他二者にも欠損がある。また、30の口縁部や33の受部にも欠損がある。これらは、土器が石室内に納められるまでの、使用に関わるものと推測される。34は広口の壺で、口縁端部は粘土を巻き込んで成形している。口縁部の欠損は、意図的に損壊された可能性が高く、端部内側（上方）から打撃を受けたとみられる。

石室外の須恵器は、9点（杯蓋4点・杯身5点）すべてを図示した。36・37、38・39、41・42は、組み合わせた状態で出土したものである。

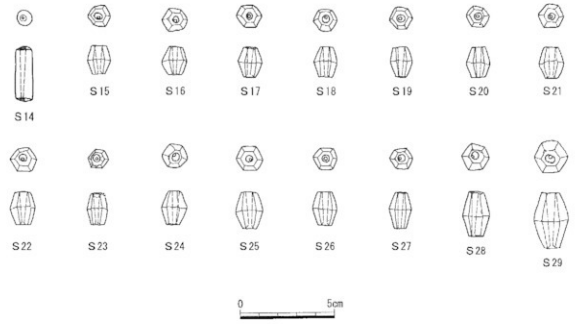


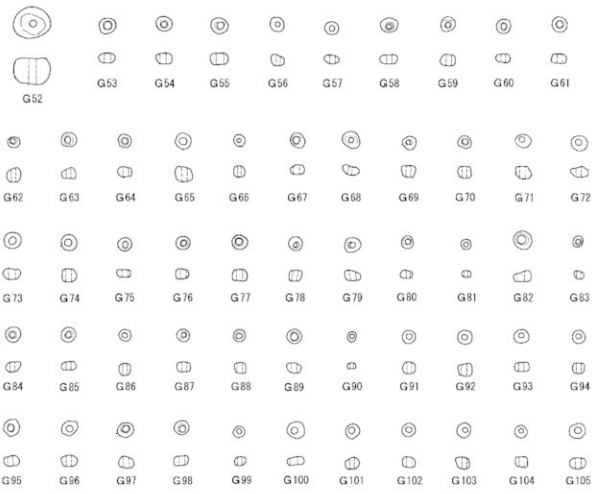
第44図　出土遺物①（1/4）

杯蓋には、天井部が平らに整形され、口縁部と体部との境に鈍い稜がある35と、凹線がめぐる36、天井部が丸味をおび、境が不明瞭な38・41がある。35・36の口縁端部に、明確な面は認められないが、38・41には面が形成されている。杯身には、底部が丸味をおび、口縁部が長くのびる37・39と、口縁部がやや短い40、底部が扁平で口縁部が短い42・43がある。これらの杯身・杯蓋の内、35・36・42・43の焼成は、他と比べて非常に堅緻で、特徴的である。なお、36・43の口縁部には磨耗が認められ、それぞれ欠損を認められる。他にも、35・38・41にも口縁部に欠損、40の受部にも欠損が認められる。これらは、土器が石室内に納められるまでの、使用に関わるものと推測される。（柴田）

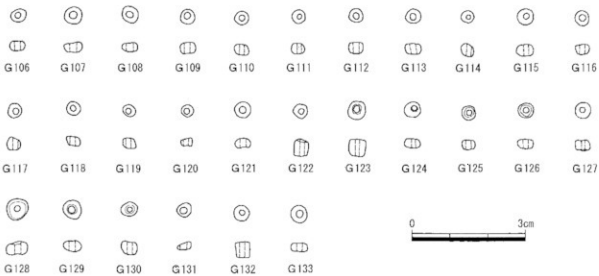
玉（第45・46図、巻頭図版2、図版16）

管玉1点、切子玉15点、ガラス玉82点を図示した。石製の玉組成は切子玉が主体で、管玉主体の3号墳との相違が顕著である。切子玉は、長さが15～20㎜未満のもの（S15～27）と、20㎜を超えるもの（S28・29）があり、3号墳の切子玉よりも大きい。ガラス小玉は、G52が径9.65㎜を測る大きなものであるが、他は径3～6㎜程度の小さいものである。この大きさに見る組成も、3号墳とは対照





第45図　出土遺物② (1/2・1/1)



第46図　出土遺物③ (1/1)

的である。ガラス小玉の多く（G53 ～ 122）は、青緑系の色を呈するが、G123 ～ 133 は濃青色ないしは薄青色系の発色である。（柴田）

4　小結

蟹本路4号墳は、径7.1 mの円墳である。3号墳と同様に、盛土の際には、墳裾に石列が巡らされている。墳丘の高さが、3号墳と比較してやや低いが、これは、盛土が流失した可能性も考えられる。石列が、東側でほとんど確認できず、また崩落した可能性があることも、そうしたことに影響しているかもしれない。

墳丘の中心から若干東にずれた位置に、竪穴式石室が構築されている。3号墳の2つの石室と比較すると、石室の規模はわずかに小さいだけであるが、使用石材はかなり小さく、壁のつくりも粗雑である。また、床面には円礫ではなく、角礫を敷き並べており、3号墳の石室とは全く異なる。ただし、須恵器を枕に転用し、足元に赤が置かれている点は、3号墳と共通する。玉類の組成は、石製の玉で切子玉が主体となるなど、3号墳の石室1とは異なり、時期差と考えられる。

他に、石室蓋石の北側に接して、須恵器杯身・杯蓋がまとまって出土したことが注目される。これは、蓋石を架けた後に、供献行為が行われたものと考えられ、3号墳との違いがここにも認められる。

石室内と石室外の須恵器は、互いに時期差は認められず、いずれも TK10 型式に相当する。さらに、その新相のものを含むことから、これが築造時期の上限である。しかし、玉類の編年観を考慮すると、築造時期は、TK43 型式並行期の可能性が高い。（柴田）

第4章　まとめ

第1節　遺構・遺物について

1　古墳の築造時期について

3基の古墳の前後関係に関しては、周溝の切り合いなどが確認されなかったために、十分明らかにできなかった。ただし、3号墳の竪穴式石室2（以下、竪穴式石室は石室と略す）については、同石室1よりも新しいことが確認された[1]。また、3号墳の拡張時に行われた盛土内から出土した遺物が、2号墳の墳丘から転落したものである可能性があることは、2号墳と3号墳石室2の前後関係を判断する材料のひとつとして重要である。なお、2号墳では、追葬が行われた可能性は低いと考えている。

本件に関して、まずは出土須恵器について検討する。2号墳は、出土した須恵器が少なく、それらで築造時期を判断することは困難である。次に述べる3・4号墳の例を見ると、2号墳の杯身2・3は、築造時期の上限を示すに過ぎない。3号墳の石室1と4号墳石室出土の須恵器は、TK10型式に相当するが、その古相から新相までのものが認められる。これらの多くが、口縁部等の磨耗が顕著であったり、受部端に微小な欠損が認められたりする。このことから、これらの須恵器は被葬者等の使用品であった可能性が推測され、新相のものが築造時期の上限を示す。なお、3号墳石室2の須恵器は、TK43型式に相当すると考えられ、遺構で確認された石室1との前後関係に矛盾は生じない。

以上、出土須恵器から推定される古墳の築造時期についてあらためて示すと、各古墳とも、TK10型式の新相並行期を上限とし、3号墳石室2の構築時期の上限であるTK43型式並行期を含む時期におさまる可能性が高い。また、石室の構造（特に小口部石積みの段数の減少傾向）からみると、3号墳石室1→4号墳石室→3号墳石室2の順序を想定することができ、須恵器等との矛盾はきたさない。

3号墳石室1と4号墳石室で共通する出土遺物には玉類があり、両者の組成等は対照的である。石製玉類では、前者が碧玉製管玉主体で、小形の水晶製算盤玉と切子玉をわずかに伴う。後者は、より大

表3　婦本路古墳群　須恵器編年表

陶邑編年 儀前地東の窯跡			TK10型式当古 コ松地区窯跡	TK10型式新古 末広山窯址	TK43型式 里所窯址
2号墳	D類	身	2・3		
3号墳　竪穴式石室1	A類	蓋	12		
		身	15	16	
	B類	蓋	17		
		身			
	C類	蓋		(14)・13	
		身			
3号墳　竪穴式石室2	A類	蓋		(21)	29・21
		身		22	25・28
4号墳　竪穴式石室（円）	A類	蓋	(29)	(30)	
		身	(31)・(32)		
	B類	蓋			
		身		(33)	
4号墳　竪穴式石室（方）	A類	蓋		(38)・(41)	
		身	37・39	(40)	
	B類	蓋	(36)・(38)		
		身		42・(43)	

※番号は実測番号。大ぜわは口縁部等の磨耗が著しいもの。（ ）は受部に微小な欠損があるもの。

形の水晶製切子玉が主体で、わずかに碧玉製管玉を伴う。管玉についても、4号墳のものは最も大きい。径の大きいガラス玉でも、径6～8㎜のものが9点出土した3号墳とは異なり、4号墳では径9.65㎜と大きく、この1点のみである。以上の点から、3号墳右室1の玉類の時期は、MT15型式・TK10型式並行期に、4号墳の玉類の時期は、TK43型式並行期に属すると考えられる[2]。玉類から判断すると、4号墳の築造時期の上限は、TK43型式並行期とすることができる。この場合、右室からみた順序が妥当であれば、3号墳石室2の構築（3号墳拡張）はTK209型式並行期まで下る可能性もある。

次に、2号墳と3号墳との関係について、他の遺物で検討する。3号墳の盛土から出土した紡錘車S13は、扁平であるが文様構成が画一化しており、TK43型式並行期か、それより若干古い可能性を考える[3]。この場合、紡錘車が2号墳か3号墳石室2のいずれに伴ったとしても、2号墳の築造時期は、既に示した範囲を逸脱するものではない。また、2号墳と3号墳右室1では、鉄鏃が出土している。2号墳の方は、欠損部が多く不明な点が多いが、どちらともTK43型式並行期以降の要素（篦被関部の棘状突起の出現）が認められない可能性があり[4]、須恵器との矛盾はないものの、やはり両墳の間に明確な前後関係は認めがたい。

このように、出土遺物を含めても、2号墳と3号墳右室1の前後関係を判断することは難しい。ただ、横穴式石室の編年観では、2号墳はTK43型式並行期と考えるのが妥当である。この場合、3号墳石室1の方が古くなると、立地関係において特殊な古墳群形成過程となる。ここでは、両者がほぼ同じ時期と考え、TK43型式並行期でも早い時期に築造された可能性を示しておく。いずれにしても2号墳は、弥上地区では比較的早い段階に導入された横穴式石室であるということができる[5]。

2　埋葬施設と墳丘にみられる共通点と相違点

上記のとおり、各古墳は、比較的短い期間の中で築造されている可能性が高い。これは、何らかの理由に基づき、横穴式右室と竪穴式右室のいずれかを選択して埋葬施設としていることを示唆する。両石室間では、規模すなわち構築に係る労働量の格差が非常に大きいことが考えられ、埋葬施設の選択は、同じ古墳群内や周辺古墳の被葬者間における階層差に原因があると考える。

さらに本古墳群の所在する弥上地区に目を向けると、埴輪や陶棺を使用する古墳が多い地域であり、土井遺跡では埴輪窯が確認されている。その中にあって、2号墳では、埴輪や陶棺が使用された形跡がない点は注意される。考えられることとしては、2号墳の時期が陶棺使用時期よりも古いか、あるいはそれ以降ではあるが、陶棺を有する畑古墳等の被葬者との関係によって使用していない、という2点をあげることができる。両墳の時期を明確にする必要があるが、右室構造のみで推測すると、2号墳の方が古いと思われることから、前者の可能性が考えられる。また、木棺ではなく、箱式石棺であることも興味深い。横穴式右室内に箱式石棺が設けられた県内の例としては、津山市カキ谷B古墳群1号墳・同市的場2号墳、瀬戸内市大塚8号墳、岡山市西山2号墳などがある[6]。

各石室の床面に敷かれた礫には、差が認められた。2号墳床面の円礫は、長径5～10㎝前後で最も大きく、次いで2号墳箱式石棺と3号墳右室2の4～8㎝、最も小さい3号墳右室1の円礫は、長径2～5㎝を測る。そして、4号墳は角礫である。このような小さな要素における差が、何を意味するかは不明であるが、埋葬に伴う明確な約束事が存在したことがうかがえる。

墳丘構築については、盛土に伴う石列の有無という点で、2号墳と3・4号墳で異なる。両者の石室構造は異なるが、基本的に右室本体を地山の中におさめ、右室上部の被覆と墳丘構築を一体で行う点では共通している。それぞれ関係が非常に近いことが想定され、共通した立地条件にもかかわらず、

このような相違が生じたことについても、今後検討が必要である。また、石列を伴う盛土工法については、国内の周辺地域だけでなく、伽耶地域を含めて考える必要がある。

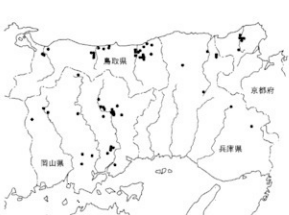
3　埋葬方法について

3基の竪穴式石室において、須恵器杯身・杯蓋を枕とする点と足元に壺などを置く点が、共通していることがわかった。さらに、壺に関しては、口縁部を打ち欠いていることも共通している。また、埋葬頭位は、標高の高い方向で3基とも一致している。

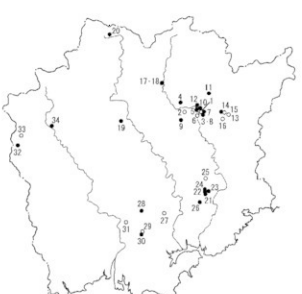
被葬者に対する枕については、有機質製や加工した石製のものを除くと、自然石を用いたものが圧倒的に多く、弥生時代後期から古墳時代後期まで認められる。他には土器転用枕があり、これは鳥取県中部～東部、兵庫県北部、京都府北部、岡山県北部を中心とした地域で比較的多く確認されている。そのほとんどが、木棺直葬や箱式石棺、竪穴式石室を埋葬施設とする小規模古墳である。これらの地域では、古墳時代前期までは鼓形器台などを使用した例が多く、やや間をおいて中期末から後期前半には、須恵器杯などを使用した枕へと転換することが指摘されている[7]。本古墳群の所在する赤磐地域は、岡山県南東部であるが、発掘調査の増加とともに、須恵器転用枕の事例が少しずつ増えている。一方、県南西部では、このような古墳があまり確認できない。これを埋葬習俗の地域差と考えたいが、県南西部では、小規模な古墳での竪穴系横口式石室の採用や調査事例数などの影響を受けている可能性もあり、現時点では地域差とは断定できない。

後期前半を中心とした時期の古墳（木棺直葬や箱式石棺を埋葬施設とする古墳）で、棺の内外に土器を置くもの（枕を除く）は、須恵器転用枕と同様に、岡山県北部から赤磐地域にかけて比較的多い。多くの場合、棺内外の小口部分に、杯身・杯蓋1～数セットと壺あるいは提瓶1～数点を置いている。ただし、棺内にある場合は、棺外には比較的少なく、その逆も言えるようである。土器組成について、両者はほとんど類似しており、内外の相違がいかに生じるかは別の観点から検討する必要がある。また、TK47型式並行期までは、棺外に土器が置かれることがあるが、棺内に置かれることはほとんど無く、棺内へ土器が入るのはMT15型式並行期以降のようである。

土器が置かれる位置は、石室内外とも被葬者の頭部あるいは足元と推測される位置になる



第47図　土器転用枕をもつ古墳分布図



第48図　土器を伴う竪穴系埋葬施設の古墳分布図
（岡山県・主に古墳後期）

※○は須恵器転用枕の無い古墳、あるいは少ない古墳群。番号は表1の番号に一致する。

表4　土器を伴う竪穴系埋葬施設の古墳一覧表（岡山県・主に古墳後期）

	所在地	古墳群・遺構名等		土器枕	棺内土器	棺外土器	文献
1	津山市	長畝山北古墳群	4号墳			●	市45
			5号墳（2）	?		●	
2	津山市	西の山古墳群	14号墳			●	市46
3	津山市	大谷古墳群	1号墳（A・E）	●		●	市47
			1号墳（B）		●	●	
			1号墳（C・D）	●	●		
			2号墳	●			
4	津山市	大開古墳群	2号墳	●			市51
			3号墳	●	●		
			4号墳	●	●	●	
5	津山市	日上畝山古墳群	6号墳（中心）33号墳（北）	●		●	市63
			6号墳（2）	?		●	
6	津山市	的場古墳群	3号墳		●		市70
7	津山市	茶山古墳群	1号墳（4・5）	●			市27
8	津山市	小原古墳群	1号墳（1）2号墳（1）	●			市38
			土壙墓2	●		●	
9	津山市	井宮古墳群	1号墳前方部	●			①
10	津山市	河辺上原古墳群	1号墳（1）	●	●		市54
			1号墳（2）			●	
			1号墳（3・4）	●		●	
			2号墳（2）	●		●	
			2号墳（4）			●	
			3号墳（1）	●		●	
11	津山市	殿山古墳群	2号墳（2）	●			市13
12	津山市	六ツ塚古墳群	3号墳（A）	●	●	●	市略報
			5号墳			●	
13	美作市	北山古墳群	1号墳（2）			●	県4
			2号墳			●	
14	勝央町	[illegible]古墳群	4号墳（T）	●		●	県7
			4号墳（Ⅱ）			●	
			5号墳（Ⅰ）	●	●		
			6号墳（T）		●		
15	勝央町	大谷古墳群	2号墳			●	県102
16	勝央町	坂田墳墓群	土壙墓54・55			●	県197
17	鏡野町	久田原古墳群	6号墳	●		●	県184
			7号墳	●			
18	鏡野町	久田堀ノ内遺跡	土壙墓1	●	●		県192
19	真庭市	旦原遺跡	No.12古墳	●	●	●	県14
			No.21古墳	●			
20	真庭市	四つ塚古墳群	13号墳（中央A）	●		●	②
			13号墳（中央B・南）	●			
21	赤磐市	[illegible]木路古墳群	3号墳（1・2）	●	●		県225
			4号墳	●	●	●	
22	赤磐市	土井遺跡	箱式石棺1	●			県191
23	赤磐市	[illegible]古墳群	2号墳	?		●	県報告17
			5号墳	●	●		
24	赤磐市	岡内池古墳群	9号墳	●			県174
25	赤磐市	才尾遺跡	土壙墓2			●	県178
26	赤磐市	岩宮古墳群	1号墳	●		●	県99
			2号墳（1）	?		●	
			2号墳（2）		●	●	
			2号墳（3）	●	●		
			5号墳	●	●		
			土壙墓22			●	
27	岡山市	西山古墳群	6号墳、11号墳			●	県109
			7号墳	●	●		
28	岡山市	南坂古墳群	8号墳（2）	●			③
29	岡山市	[illegible]・窪山遺跡	土壙-7		●		県89
30	倉敷市	矢部古墳群B	47号墳	●			県82
31	総社市	すりばち池古墳群	7号棺		●		県13
32	新見市	横見古墳群	2号墳	●	●		県23
			5号石蓋土壙墓	●			
33	新見市	野上原遺跡	1号墳			●	県21
34	新見市	岩倉古墳群	第4号墳、4・5号シスト	●			県14
			土壙墓			●	

※文献：①近藤義郎『佐良山古墳群の研究』第1冊　津山市　1952　②近藤義郎『蒜山原四つ塚古墳群』（改訂版）　岡山県八束村　1992　③『南坂8号墳　一岡山城跡　一岡山古墳群』　岡山市教育委員会　2006
「県○」は岡山県埋蔵文化財発掘調査報告、「県報告○」は岡山県埋蔵文化財報告、「市○」は津山市埋蔵文化財発掘調査報告あるいは総社市埋蔵文化財発掘調査報告、「市略報○」は津山市文化財調査略報のシリーズ番号

が、棺内の場合には、どちらが多いというような傾向は現在のところ認められない。ただし、頭部と足元の両方に土器が置かれることは少ない。棺外の場合も、頭部と足元のどちらに多いかという点については、あまり明確な差が認められないが、両方に置かれる例が比較的多いようで棺内とは異なる。3・4号墳とも、ほぼ同様な状態がみられたが、4号墳石室外の土器は、他の古墳と比較すると種類が少ない。

竪穴系埋葬施設における、以上のような埋葬行為が、時期の近い横穴式石室内でのあり方と比較して、どのような共通点や相違点があるかについては、今後よく検討する必要がある。横穴式石室での須恵器転用枕について言えば、カキ谷B古墳群1号墳の箱式石棺内の杯身2点や、本古墳群2号墳の杯身2点はその可能性がある。また、県内における、須恵器転用枕や棺内外に土器埋納を行う古墳の分布については、今後の資料蓄積を待つ必要があるが、時期的にこの直後から使用が始まる陶棺の分布と重なる可能性も考えられるなど、吉井川水系でつながる埋葬習俗を考える上で興味深い。

なお、3号墳は、墳丘の拡張が確認された良好な事例である。検出状態から、石室2を石室1と同じ墳丘に設置する必要があるが、十分な面積の確保が困難であったことが、原因のひとつと考える。そこには、2回目の埋葬が、先の埋葬とは重なってはならないという強い意識が感じられる。一般的にも複数埋葬の場合、相互の埋葬施設は切り合いを避けていることが多く、今回のような小規模古墳の場合は、特に墳丘構造にも注意が必要であることを痛感した。

4　須恵器について

本古墳群から出土した須恵器杯蓋と杯身について、天井部や底部の形態で分類すると、表3に示したように、A・B・C・D類に分けることができる。A類は丸味を帯びるもので、B類は器高が低く扁

平なもの、C類は器高が高く天井部や底部のやや狭い範囲が平らに整形されているものである。D類は2号墳の杯身のみであるが、A類とB類との中間的な要素を認めることができる。B類に関しては、径が他よりもわずかに小さく、焼成が非常に堅緻であるという特徴もある。出土総数がわずかであるが、B類は他と比べて明らかな相違があり、製作地や工人などが異なる可能性がある。なお、これに類似する須恵器は、赤磐市八塚3号墳でも出土しており、A類と共伴している[8]。

この他の器種では、瓶19、脚付長頸壺7・18などが注目される。瓶19は、球体に近い胴部にラッパ状の口頸部が取り付く平底の壺で、類例が少ないが、斎富2号墳第4主体部で出土例がある。脚付長頸壺7・18の脚部は、端部形態や3方向に円形の透かしを持つ点が特徴的である。時期が近い斎富2号墳第1主体や斎富古墳群内の土壙墓22の壺脚部が、器台と同じ形態であることを考えると、興味深い。

今後、窯跡等の資料が増加し、当地域の須恵器編年が確立すれば、B類の杯や各種の特徴的な須恵器などを分析することによって、須恵器生産や供給のあり方を具体的に知ることができるであろう。当地域は、磐梨古窯跡群の一角であり、邑久古窯跡群も近くに所在する。10・11のように、須恵器の整形技法が認められる土師器は、本古墳群が須恵器の生産地に近いことを思わせる。将来、窯跡資料の充実が期待されるところである。　（柴田）

註

(1) 今回、3・4号墳の埋葬施設を、「竪穴式石室　と称して報告したが、これらは石積みで構築された　石槍」である。これまでにも論じられているが、「室・槨・槍」の用語整理の必要性を強く感じた。また、従来の一般的な箱式石棺との区別も必要であろう。

(2) 大賀克彦「山陰系玉類の基礎的研究」「出雲玉作の特質に関する研究―古代出雲における玉作の研究Ⅲ―」島根県古代文化センター　島根県埋蔵文化財調査センター　2009

(3) 豊島雪絵「古墳時代における石製枕運車の性格―中国・近畿地方出土例を中心に―」『古代吉備』第23集　2001
これによるとS13は、大きさではⅡ期（TK23～47型式並行期）の様相を呈し、文様構成では、Ⅲ期（TK43～217型式並行期）の様相を示す。

(4) 尾上元規「古墳時代後期における鉄鏃の地域性形成について―岡山県南部を例としてみた鉄器生産の画期―」『古代吉備』第17集　1995

(5) 横穴式石室については、第2節で詳述している。

(6) 「カキ谷B古墳群1号墳　カキ谷B古墳群1号墳埋蔵文化財発掘調査委員会　1987
「的場古墳群　『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第70集　津山市教育委員会　2001
『長船町史　史料編（上）考古　古代　中世　　長船町　1998
「田益新田遺跡　西山古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』109　岡山県教育委員会　1996

(7) 豊島直博「枕を用いる葬送儀礼の展開―岡山県北部を中心に―　「古代吉備」第22集　2000
瀬戸谷晧「土師器転用枕について」『北浦古墳群』豊岡市教育委員会　1980
石崎善久「須恵器出土の木棺直葬墓―京都府北部における須恵器出土状況の検討―」『京都府埋蔵文化財論集』第2集　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1991

(8) 当地域のTK10型式並行期には、かなり焼成の悪いものが混在するようであるが、斎富古墳群などをみると、これ以降はそのような割合は減少し、焼成の堅緻なものが多くなる傾向があるかもしれない。

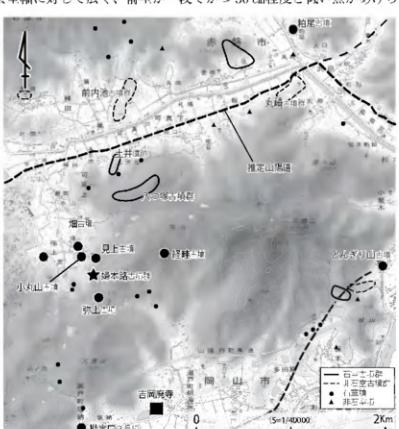
第２節　可真・弥上地区における婦本路古墳群の位置づけ

はじめに

婦本路古墳群の所在する赤磐市可真・弥上地区は、古代山陽道が通り、駅家の存在も推定されるような重要な地域であり[1]、近年では５世紀後半代の前内池古墳群や６世紀代の埴輪窯がみつかった上井遺跡など、古墳時代から古代にかけて注目すべき遺跡が数多く展開する地区といえよう。また婦本路古墳群の造営時期である６世紀後半代では、前方後円墳である弥上古墳や大形の横穴式石室に古式の陶棺をもつ畑古墳の存在などがあり、そういった婦本路古墳群をとりまく歴史的環境のなかで今回の調査成果をいかに位置づけられるか考えていきたい。

婦本路古墳群の構造と特質

婦本路古墳群は３基の古墳からなる古墳群で、今回は２・３・４号墳を対象に調査が行われた。この３基は、１・５号墳がやや離れて立地するのに対し、近接したまとまりをもって立地しており、古墳それぞれの関係性は古墳群全体の中でも極めて緊密であったものと考えられ、単位群のあり方を検討する上でも非常に有意義なデータとなりうるだろう。２号墳は、３基のなかで唯一横穴式石室をもつ径８ｍの円墳である。石室は全長6.29ｍの石片袖式横穴式石室で、奥壁最下段の石材がやや大形である点、玄門袖石が縦方向に据えられるという要素はあるものの、側壁段数が５～７段程度で、やや古手の石室の要素をもつ。石室には箱式石棺が据えられており、床面の礫敷と石蓋の排水溝をもつ。石室の平面形・立面形の特徴は、羨道幅が玄室幅に対して広く、前壁が一段でかつ30 cm程度と低い点があげられる。３号墳には２基、４号墳には１基、それぞれ長さ２ｍ程度の小型穴式石室があり、両古墳には埋葬施設のあり方や墳丘の石列など類似点が多く、２号墳とは対照的な面をもつ。これら３基の竪穴式石室では、副葬品組成などの細部はもちろん異なるものの、床面の礫敷・傾斜、須恵器枕、壺や杯などの供献土器の副葬など埋葬方法に共通点をもつ。



第49図　可真地区周辺の古墳分布図

墳丘については、２号墳は背後から側面にかけて周溝をもつ円墳であり、３号墳・４号墳は石列で墳丘を区画するタイプの円墳である。３号墳に関しては、墳丘規模からすると、比較的高い盛土をもつ点や、深い埋葬施

表5　婦本路古墳群の副葬品組成

	埋葬施設	全長(m)	副葬品					
			鉄刀	鉄鏃	刀子	耳環	玉類	須恵器（石室内・枕除く）
2号墳	横穴式石室	6.29	1	6	1	2		甲午長頸壺・広口壺・短頸壺
3号墳石室1	竪穴式石室	1.99		3			あり	甲午長頸壺・平底壺
3号墳石室2	竪穴式石室	1.95						杯蓋・身
4号墳	竪穴式石室	1.82					あり	広口壺

設（石室1）をもつ点で4号墳とは異なる。さらに、墳丘を拡張して新しい埋葬施設（石室2）を増築していることが判明し、大変注目すべき事例といえる。また、近接する2号墳が横穴式石室を導入しているにも関わらず、竪穴系の墓制が継続する点は興味深い。2号墳と3号墳の被葬者の社会的な関係が問題となってくることはもちろんであるが、横穴式石室の導入の契機と、追葬の普遍性が強い浸透力をもって導入時の段階から地域に根付いていくというプロセスには、これまでの岡山市西山古墳群[2]や赤磐市斎富古墳群[3]などの調査成果を含めて再考すべき問題としてあげられるだろう。

次に被葬者の社会的な関係性を考えるにあたって、個々の埋葬施設の副葬品組成から階層差を考えていく手段は有効であろう。幸いにも3・4号墳の小竪穴式石室では、埋葬施設にまで乱掘を受けていなかった。副葬品の組成は表5のとおりである。2号墳の石室は乱掘を受けており全体を把握できていないが、鉄刀をもつ点では3・4号墳よりやはり上位に位置づけられるであろう。3・4号墳は石室規模や埋葬方法において類似点をもつことは前述のとおりであるが、鉄鏃の有無、玉類の有無、足元の須恵器の器種に差があり、3号墳石室1－4号墳－3号墳石室2の順で階層的な差があり、被葬者の社会的な関係がうかがえるであろう。

また、これらの古墳の編年的位置づけや時間的な前後関係については、比較的短期間に集中的に築造されたと考えている。2号墳の横穴式石室は側壁段数が5～7段で、段数が多い点は古い要素であると考えられるが、奥壁基底部石材の大形化、袖部の縦方向の立石、閉塞の位置が開口部付近にある点などは新しい要素である。古手の石室に新しい要素が取り込まれる段階であり、TK10型式新相～TK43型式ごろの年代観が与えられると考えられ、出土した遺物の年代観とも齟齬はない。3・4号墳の小竪穴式石室の前後関係に関しては、副葬される須恵器にやや時期幅が認められ、はっきりしない点もあるが、3号墳に関しては石室の位置関係から石室1－石室2の前後関係は明白である。それを手がかりに石室の構造差を検討すると、石室1の小口が3段であるのに対し、石室2の小口が1石で構成されており、横穴式石室の変化と同調する可能性がある。そういった観点から考えれば、4号墳の石室は3号墳石室2より古く位置づけられそうである。ただ3・4号墳ともに各埋葬施設の遺物の編年観からするとTK43型式～TK209型式を前後する時期に位置づけられ、2号墳を含め短期間に単位群が形成されたと考えられる。

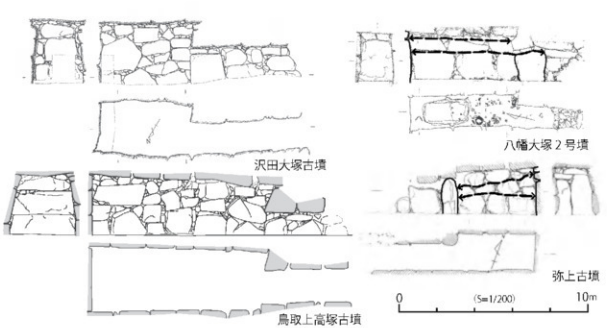
ちなみにやや離れて立地する1号墳は石室残存長3.5 m、幅1.5 mの無袖石室で、やや時期が下った7世紀前半代のものと考えられ、5号墳は性格が不明である。現状では2号墳を核に3・4号墳が階層差をもって短期間に群を形成し、7世紀になってやや離れて1号墳が築造されたと考えられる。

可真・弥上地区における6・7世紀の動向

婦本路古墳群の構造を明らかにした上で、周辺の動向から地域の中での位置づけを明らかにしていこう。これまでのところ古墳時代前半期の古墳の存在は明確になっておらず、可真・弥上地区で造墓活動が盛んになるのは5世紀後半以降であると考えられる。丸崎古墳群や前内池古墳群などが調査さ

れた例としてあげられ、前内池古墳群[4]では、埋葬施設が箱式石棺や土壙墓、木棺直葬などで、比較的簡素なものであったが、墳丘から形象・円筒埴輪や須恵器が豊富に出土しており、周辺部で埴輪も焼成されていたと考えられている[5]。また、これらの古墳群の展開は、可真川沿いに近い比較的低い丘陵上に展開しているようである。

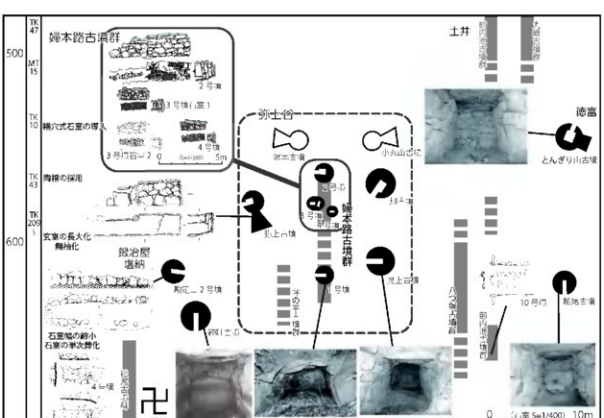
そういった5世紀代の古墳のあり方に引き続いて、6世紀になると可真川を遡って南に奥まった弥上谷に有力な古墳が多く築造される。実態の不明確なものも多いが、30mクラスの前方後円墳として小丸山古墳・塚本古墳・弥上古墳があげられる。また墳形・規模は不明であるものの、大形の横穴式石室をもつ畑古墳は、同じような階層の古墳として位置づけられるだろう。小丸山古墳[6]は、明治年間に道路改修によって墳丘の大半を破壊されてしまったが、人物埴輪をはじめ多数の埴輪を伴っていたものと考えられる。埋葬施設は破壊されてしまったものの、左片袖式横穴式石室をもつ可能性が高く、内部には多数の須恵器が副葬されていたようである。畑古墳[7]と弥上古墳[8]は、10mクラスの横穴式石室に、初期の陶棺が用いられた古墳として注目される。また、弥上古墳の調査では、金銅装三葉文楕円形杏葉や須恵器の多量副葬がわかっており、被葬者の階層も高いものであっただろう。これらの横穴式石室に関しては、片袖式で袖部に立石をもち、奥壁が弥上古墳では左右2枚をあわせているものの、一枚化への志向性が強く、側壁は弥上古墳で明確なように比較的横目地が通るという特徴をもつ。これまで知られている備前の6世紀後半代の大形の横穴式石室のうち、岡山市沢田大塚古墳[9]や赤磐市鳥取上高塚古墳[10]などは、奥壁の一枚化への志向性が低く、側壁の積み方も目地を意識しながら石材を徐々に積み上げていく方向性は認められない。弥上古墳や畑古墳に近い壁面構成をもつ例として、岡山市八幡大塚2号墳[11]などの例をあげることができるものの、備前全体で見ればやや異質で、県南でも備中や他地域の横穴式石室との技術的な親縁性も検討する必要性はある[12]。また、弥上古墳や畑古墳の横穴式石室は、羨道幅が玄室幅に対して広い点と、前壁が1段でかつ低い点が特徴と



第50図　備前南部における6世紀後半代の大形横穴式石室

してあげられ、婦本路2号墳もそれらと同じ傾向をもち、小地域色としてとらえることができるだろう。編年的な位置づけや各古墳の時間的前後関係に関して、弥上古墳では三葉文楕円形杏葉の編年観から年代がやや上がる可能性もあるが[13]、須恵器の編年観はTK43～TK209型式を前後するような時期で、備前の中では岩田14号墳[14]より後出する。他の古墳に関しては実態がよくわからない点も多いが、畑古墳に関しては断片的な情報がある。畑古墳の横穴式石室は左片袖式でありながら、袖のない右側壁の玄門部付近の石材が立石のように縦方向に据えられている点を考えれば、石室の年代観は、畿内で両袖式石室の出現以降のものと考えるのが妥当であると思われ、TK43型式ごろの所産であろう。出土した陶棺や石室の編年観からは弥上古墳よりもやや古くなりそうだが[15]、両者の時期差はそれほど大きくはないと考えられる。その他では小丸山古墳で埴輪が豊富に出土している点を勘案すると、編年的な根拠はやや弱いものの、畑古墳や弥上古墳に比べて時期が遡る可能性を想定しておきたい。

7世紀代の古墳は、調査された例が前内池古墳群の中の数基のみであり、調査例が極めて少ないため詳細な検討は今後の課題である。7世紀以降の横穴式石室の構造は、岡山県内や備前の全体的な傾向からすると、無袖化ないしは玄室が長大化し袖部が不明瞭になることが多いようである。そして7世紀後半代には、単次葬を志向した幅の狭い横穴式石室が盛行するものと考えられる。7世紀前半代の例は弥上谷では見上古墳が、周辺では粕尾古墳や八つ塚古墳群があげられるだろう[16]。八つ塚古墳群などの断片的な情報から、これらの古墳の多くには陶棺が採用されている可能性が高い。この長大化したタイプの横穴式石室には、調査成果が充実している美作地域の事例から考えると、多数埋葬を志向した埋葬方法が推定できるだろう。また特異な存在としてあげられるのは、加山山頂に立地する経畦古



第51図　可真地区周辺の6・7世紀代の古墳の変遷

墳である。20mクラスの大形円墳であり、壁体が整った大形の横穴式石室をもち、丘陵頂部に単独で立地する終末期古墳であると考えられる。弥上谷の有力墳との系譜関係があるかどうかは断定できないが、南側の古岡廃寺[17]との関係が考えられる可能性がある。

地域の中の婦本路古墳群の位置づけ

このような歴史的環境の中で、婦本路古墳群の位置づけを考えるならば、2号墳の横穴式石室は、弥上古墳や畑古墳と石材の大きさや段数で相違があり、これは時期差や階層差に起因していると考えられる。また平面形・立面形については類似点が指摘でき、地域内で同じ志向性をもって横穴式石室が構築されている点から、石室構築の上で両者の有機的な関係性は強くうかがえる。その一方で上井遺跡の調査成果から明らかなように、6世紀後半以降は地域内で陶棺が製作され、有力墳から順に陶棺が採用されていく背景の中で、2号墳では箱式石棺が採用される点が異なっている。また弥上古墳や畑古墳が複数棺を内部に安置しているのに対し、婦本路古墳群においては単葬傾向で、陶棺が採用される以前の古墳であるか、もしくは被葬者の社会的な位置づけの違いがあらわれていると考えられる。上井遺跡では、埴輪・陶棺生産に加えて鍛冶ないしは製鉄が行われていた可能性が考えられている[18]。また、前内池古墳群の埴輪も地域内で生産されていたと考えられており、5世紀後半以降の可真地区内では、いくつかの手工業生産が行われていたものと推定される。弥上谷の有力古墳の被葬者は、このような手工業生産や交通路の管理を行うような存在であったと仮定すれば、婦本路古墳群の被葬者たちは、横穴式石室の形態の類似性から、弥上古墳などの有力者たちとの繋がりがあったことは確実であるが、埴輪・陶棺製作に関わっているとは考えがたく、別の社会的な役割や背景を考える必要があるだろう。

（神栗）

註

（1）山陽道のルートは時期によって吉井川から可真川を遡るルート以外に南の瀬戸町域の鍛冶屋を通っていた時期もあったようである。
金田章裕・木下良・立石友男・井村博宣『地図でみる西日本の古代』平凡社　2009

（2）福田正継「西山古墳群　田益新田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』109　岡山県教育委員会　1996

（3）吉久正見・安井悟・福田正継「松尾古墳群　斎富古墳群　馬屋遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　岡山県教育委員会ほか　1995

（4）内藤善史・鍾原啓介「前内池遺跡　前内池古墳群　佐古遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』174　岡山県教育委員会　2003

（5）垂根弘和「埴輪について」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191　岡山県教育委員会　2005

（6）高畑知功「古墳時代」『熊山町史』通史編　熊山町　1994

（7）註(6)と同じ、高畑1994

（8）山磨康平「弥上古墳」『岡山県史』考古資料編　岡山県史編纂委員会　1986

（9）江原健二「沢田大塚古墳の墳丘測量と石室実測」『サヌカイト』第2号　岡山理科大学学友会考古学部　1969

（10）山崎信二『横穴式石室構造の地域別比較研究－中・四国編』1986

（11）鎌木義昌・亀田修一「八幡大塚2号墳」『岡山県史』考古資料編　岡山県史編纂委員会　1986

（12）弥上古墳では側壁の横目地は揃うものの、袖部立石との目地は通らない。これと近い形で石室を構築するのは県南では備中のこうもり塚古墳をはじめとする大形古墳に認められる特徴である。奥壁と袖部立

石を据えて石室の平面形・立面形を規定し、側壁を積み合わせていく石室構築のあり方である。一方で八幡大塚2号墳では、袖石と側壁の横目地がよく通ることから、側壁最下段と袖石の設置の段階で、壁体構築における中途の作業停止面を想定でき、石室構築の方法で姫上古墳とは異なると考えられる。このような石室構築の方法は、奥壁を一枚化する点で異なるものの、どちらかというと畿内中枢部や、地方では若干時期は下がるが備後南部芦田川流域の二子塚古墳以降の石室に近いだろう。

(13) 松浦宇哲「三葉文楕円形台葉と井ノ内稲荷塚古墳－念銅装馬具にみる多元的流通ルートの可能性－」「井ノ内稲荷塚古墳の研究」大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団　2005

(14) 神原英朗『岩田古墳群』山陽町教育委員会　1976

(15) 杉山尚久「陶棺の研究」『考古学研究』第38巻第4号　考古学研究会　1987

(16) 註(6) と同じ、高畑　1994

(17) 柳瀬昭彦「古岡廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』49　岡山県教育委員会　1982

(18) 山磨康平・重根弘和・物部茂樹・亀山行雄「土井遺跡 谷の首遺跡　慶運寺跡　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』191　岡山県教育委員会　2005

表6　土器観察表

掲載番号	挿図番号	出土遺構名等	種別	器種	計測値(cm) 口径	底径	器高	色調 外面/内面	胎土	焼成	状態	ヘラケズリ回転方向	形態・手法の特徴など
1	第9図	4号墳 周溝部 流入土	須恵器	高台付坏	-	10.4	(2.1)	灰白(2.5Y7/1) 灰白(2.5Y7/1)	砂粒(ウンモ・長石)少	良好		-	
2	第20図	2号墳 玄室床面	須恵器	杯身	12.8	-	4.6	灰白(5Y8/1) -	砂粒(長石・石英・黒色粒)、礫多	良	完形	左	
3	第20図	2号墳 玄室 流入土	須恵器	杯身	12.7	-	4.4	灰白(5Y7/1) 灰(N5/)	砂粒(長石・石英)多	良	ほぼ完形	左	内面当て具痕
4	第20図	2号墳 玄室 流入土	須恵器	壺	8.5		10.2	灰白(5Y8/1) 灰白(5Y8/1)	砂粒(長石・石英)中	不良	ほぼ完形		
5	第20図	2号墳 墳丘周辺	須恵器	[illegible]	8.0	-	3.4	灰(N5/) 灰(N5/)	砂粒(長石・石英)中	良好	完形	左	自然釉
6	第20図	2号墳 玄室 流入土	須恵器	[illegible]	8.4	-	(12.9)	灰白(5Y7/1) 灰白(5Y7/1)	砂粒(長石・石英・黒色粒)多	良好		右	自然釉
7	第20図	2号墳 玄室 流入土	須恵器	脚付長頸壺	9.0	11.1	26.4	灰(N5/) 灰(N5/)	砂粒(長石・黒色粒)多(赤色粒)少	良好	復元	-	体部外面に平行タタキ成形　透かし3方向
8	第20図	2号墳 閉塞施設 流入土	須恵器	甕	17.4	-	(5.8)	灰(N5/) 灰(N5/)	砂粒(長石)十 (石英)少	良好		-	
9	第20図	2号墳 閉塞施設 流入土	須恵器	甕	-	-	-	暗灰(N3/) 灰褐(5YR4/2)	砂粒(長石・石英)中	良好		-	
10	第20図	2号墳 羨道 流入土	土師器	小型壺	10.4	3.0	15.3	橙(7.5YR7/6) 橙(7.5YR7/6)	砂粒(長石・石英・赤色粒)多	良好	復元	-	外面から口縁部内面にベンガラ
11	第20図	2号墳 玄室 流入土	土師器	壺			(4.5)	橙(7.5YR7/6) 橙(5YR6/6)	砂粒(長石・石英)中 (角閃石)少	良好			
12	第32図	3号墳 竪穴式石室1(北)	須恵器	杯蓋	14.4	-	4.4	暗灰(N3/) 灰(5Y4/1)	砂粒(長石・石英)少	良好	完形	左	口縁部摩耗　内外面にわずかにベンガラ
13	第32図	3号墳 竪穴式石室1(北)	須恵器	杯蓋	14.3	-	4.2	灰(N6/) -	砂粒(長石・石英・黒色粒)、礫多　砂粒(赤色粒)少	良好	完形	右	内面当て具痕
14	第32図	3号墳 竪穴式石室1(枕)	須恵器	杯蓋	13.8	-	4.3	暗灰(N3/) -	砂粒(長石・石英)多	良好	完形	左	口縁部3か所欠損
15	第32図	3号墳 竪穴式石室1(枕)	須恵器	杯身	13.0	-	5.0	暗灰(N3/) 暗灰(N3/)	砂粒(長石・石英)中、礫少	良好	完形	左	内面当て具痕　自然釉
16	第32図	3号墳 竪穴式石室1(枕)	須恵器	杯身	13.2	-	4.6	灰(N5/) 灰(N5/)	砂粒(長石・石英)中	良好	完形	右	
17	第32図	3号墳 竪穴式石室1(枕)	須恵器	杯身	12.0		3.4	暗灰(N3/) 	砂粒、礫(長石・石英・黒色粒)多	良好	完形	左	内面仕上げナデ
18	第32図	3号墳 竪穴式石室1	須恵器	脚付長頸壺	9.5	11.0	24.9	灰(N5/) 灰(N5/)	砂粒(長石)多 (石英)少、礫多	良好	ほぼ完形	-	口縁部欠損　外面にカキ目・タタキ痕跡　透かし3方向
19	第32図	3号墳 竪穴式石室1	須恵器	𤭯	7.6	7.2	14.1	褐灰(7.5YR6/1) 褐灰(7.5YR5/1)	砂粒(長石)多、礫少	良好	ほぼ完形	-	口縁部欠損　自然釉
20	第34図	3号墳 竪穴式石室2(枕)	須恵器	杯蓋	14.1	-	4.5	灰(5Y5/1) -	砂粒(石英・角閃石)少	良好	完形	右	
21	第34図	3号墳 竪穴式石室2(枕)	須恵器	杯蓋	14.3	-	4.1	灰白(5Y7/1) 灰白(5Y7/1)	砂粒(長石)、礫多 (石英)少	良好	完形	左	口縁部1か所欠損　自然釉
22	第34図	3号墳 竪穴式石室2(枕)	須恵器	杯身	12.4	-	4.7	灰(N5/) 灰(N5/)	砂粒(長石・石英)中、礫中	良好	完形	左	口縁部摩耗
23	第34図	3号墳 竪穴式石室2(枕)	須恵器	杯身	12.8	-	5.1	灰(N5/) 灰(N5/)	砂粒(長石・黒色粒)多 (石英・ウンモ)少	良好	完形	右	
24	第34図	3号墳 竪穴式石室2	須恵器	杯蓋	14.6	-	4.2	灰白(10YR7/1) 灰白(10YR7/1)	砂粒(長石・黒色粒)多 (ウンモ)+	良好	完形	右	25との組み合わせ
25	第34図	3号墳 竪穴式石室2	須恵器	杯身	13.4		4.7	明褐灰(7.5YR7/1) 明褐灰(7.5YR7/1)	砂粒(長石)多 (ウンモ)+ (黒色粒)少、礫少	良	完形	左	24との組み合わせ
26	第35図	3号墳 墳丘南西部 流入土	須恵器	甕	-	-	-	暗灰黄(2.5Y5/2) 橙(5YR6/6)	砂粒(長石)+ (角閃石・石英)少	不良		-	
27	第35図	3号墳 墳丘南西部 表土	須恵器	子持高坏	10.0	-	(5.8)	灰(5Y6/1) 灰(5Y6/1)	砂粒(長石・石英・黒色粒)少	良好		左	
28	第35図	3号墳 墳丘南西部 盛土内	須恵器	器台	23.1	-	(40.0)	灰(N5/) 灰褐(5YR4/2)	砂粒(長石・石英)少	良好		-	三角形透かし・長方形透かし3方向
29	第42図	4号墳 竪穴式石室内(枕)	須恵器	杯蓋	14.0		4.4	灰(N5/) 	砂粒(長石・石英)多	良好	完形	左	内面仕上げナデ　自然釉　口縁部摩耗、2か所欠損
30	第42図	4号墳 竪穴式石室内(枕)	須恵器	杯蓋	14.7		5.0	灰白(5Y7/1) 灰(N5/)	砂粒(長石・石英)少	良好	完形	左	口縁部欠損
31	第44図	4号墳 竪穴式石室内(枕)	須恵器	杯身	12.6	-	5.0	灰黄褐(10YR5/2) 	砂粒(長石・石英)少、礫少	良	完形	右	口縁部一部欠損、摩耗
32	第42図	4号墳 竪穴式石室内(枕)	須恵器	杯身	12.5		4.5	灰(N5/) 灰(N5/)	砂粒(長石・石英)少	良好	完形	左	内面仕上げナデ　自然釉　口縁部摩耗、欠損
33	第42図	4号墳 竪穴式石室内(枕)	須恵器	杯身	12.4		4.2	黄灰(2.5Y5/1) 	砂粒(長石・石英)中 (ウンモ)少	良好	完形	左	内面仕上げナデ　受部欠損
34	第44図	4号墳 竪穴式石室内	須恵器	壺	12.8	-	10.5	灰(5Y6/1) 灰(5Y6/1)	砂粒(長石)多 (黒色粒)中 (石英)少、礫中	良好	ほぼ完形	左	口縁部欠損　自然釉
35	第44図	4号墳 竪穴式石室外	須恵器	杯蓋	14.0	-	4.2	灰(N6/) 灰(N6/)	砂粒(長石・石英)中	良好	完形	左	内面仕上げナデ　口縁部2か所欠損
36	第42図	4号墳 竪穴式石室外	須恵器	杯蓋	12.2		3.9	灰(N6/) 	砂粒(長石)多 (石英・ウンモ)、礫少	良好	完形	左	内面仕上げナデ　口縁部摩耗、2か所欠損　ベンガラ　37と組み合わせ
37	第44図	4号墳 竪穴式石室外	須恵器	杯身	12.6	-	4.7	赤灰(2.5YR5/1) -	砂粒(長石・ウンモ)多 (赤色土粒)+、礫少	良好	完形	左	内面当て具痕　36と組み合わせ
38	第44図	4号墳 竪穴式石室外	須恵器	杯蓋	14.4	-	4.2	灰(5Y5/1) 黄灰(2.5Y5/1)	砂粒(長石・石英)中	良好	完形	右	内面仕上げナデ　口縁部欠損　39と組み合わせ
39	第44図	4号墳 竪穴式石室外	須恵器	杯身	11.5	-	4.4	灰褐(7.5YR4/2) -	砂粒(長石・石英)中	良好	完形	左	内面仕上げナデ　38と組み合わせ
40	第44図	4号墳 竪穴式石室外	須恵器	杯身	12.5	-	4.5	灰(N6/) 灰赤(2.5YR5/2)	砂粒(長石・石英)少	良好	完形	左	内面仕上げナデ　受部欠損　外面ヘラ記号
41	第42図	4号墳 竪穴式石室外	須恵器	杯蓋	14.5		4.4	灰(N6/) -	砂粒(長石・石英・ウンモ)多、礫中	良好	完形	左	内面当て具痕　仕上げナデ　口縁部2か所欠損　外面ヘラ記号　42と組み合わせ
42	第44図	4号墳 竪穴式石室外	須恵器	杯身	12.3	-	4.0	灰(N6/) -	砂粒多(長石)多 (石英)少、礫少	良好	完形	右	内面当て具痕　仕上げナデ　41と組み合わせ
43	第44図	4号墳 竪穴式石室外	須恵器	杯身	[illegible]	-	2.7	灰(N5/) 灰(N6/)	砂粒(長石・石英)少	良好	完形	左	口縁部摩耗、1か所欠損

※各欄の「－」は、計測不能や観察不能ないし観察結果が不明であることを示す。また、記載欄の空欄は、該当であることを示す。
※計測値の「(数字)」は、残存値であるが、掲載番号26の器台のみは復元残存値である。
※色調は、『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修)を基準として、土色名とマンセル値を表示した。

表7　玉類一覧表

遺物番号	掲載図番号	出土遺構名等	器種	計測値（mm） 最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）	重量（g）	材質	色調 具体色名（マンセル値）	備考
S1	第55図	3号墳　竪穴式石室内	管玉	18.82	7.38	2.77	0.76	1.93	碧玉	ごく暗い青緑（2.5BG2.5/2.5）	
S2	第55図	3号墳　竪穴式石室内	管玉	20.68	7.51	2.85	0.87	2.14	碧玉	ごく暗い青緑（2.5BG2.5/2.5）	
S3	第55図	3号墳　竪穴式石室内	管玉	20.73	7.79	1.86	0.90	2.41	碧玉	ごく暗い青緑（2.5BG2.5/2.5）	
S4	第55図	3号墳　竪穴式石室内	管玉	20.47	6.96	2.21	1.00	3.05	碧玉	ごく暗い青緑（2.5BG2.5/2.5）	
S5	第55図	3号墳　竪穴式石室内	管玉	21.06	8.69	2.43	0.99	2.67	碧玉	ごく暗い青緑（2.5BG2.5/2.5）	
S6	第55図	3号墳　竪穴式石室内	管玉	23.91	9.92	3.21	0.96	4.02	碧玉	ごく暗い青緑（2.5BG2.5/2.5）	下端凹む
S7	第55図	3号墳　竪穴式石室内	管玉	24.32	8.25	3.43	1.54	2.87	碧玉	ごく暗い青緑（2.5BG2.5/2.5）	
S8	第55図	3号墳　竪穴式石室内	管玉	27.38	8.87	3.40	0.93	3.79	碧玉	ごく暗い青緑（2.5BG2.5/2.5）	
S9	第55図	3号墳　竪穴式石室内	管玉	21.11	7.85	3.05	1.00	2.19	碧玉	ごく暗い青緑（2.5BG2.5/2.5）	両面穿孔
S10	第55図	3号墳　竪穴式石室内	管玉	21.93	7.95	3.14	2.73	2.26	碧玉	ごく暗い青緑（2.5BG2.5/2.5）	両面穿孔、稜状節理
S11	第55図	3号墳　竪穴式石室内	切子玉	11.54	8.67	3.20	1.12	1.10	水晶	透明	
S12	第55図	3号墳　竪穴式石室内	算盤玉	9.28	8.71	2.32	1.32	0.91	水晶	透明	
G1	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	4.28	5.74	2.02	1.05	0.25	ガラス	ごく暗い紫みの青（5PB2.5/2）	穿孔少し押口形
G2	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	4.50	5.54	2.03	2.03	0.23	ガラス	こい紫みの青（7.5PB3.5/11）	
G3	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	5.75	7.47	1.51	1.42	0.42	ガラス	こい紫みの青（6PB3/8）	
G4	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	6.35	7.78	1.56	1.54	0.56	ガラス	ごく暗い紫みの青（5PB2.5/2）	孔方向の気泡あり
G5	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	5.17	7.80	1.51	1.50	0.47	ガラス	ごく暗い紫みの青（5PB2.5/2）	孔方向の気泡あり
G6	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	4.98	8.17	1.41	1.36	0.46	ガラス	ごく暗い青　（2PB2/3.5）	孔方向の気泡あり
G7	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	4.75	7.36	1.81	1.75	0.37	ガラス	ごく暗い青　（2PB2/3.5）	
G8	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	3.74	5.60	1.30	1.30	0.18	ガラス	つよい青（7B4.5/6）	
G9	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	4.15	5.74	1.27	0.74	0.26	ガラス	つよい青（7B4.5/6）	
G10	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.45	4.21	(0.70)	(0.73)	(0.06)	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G11	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.10	3.63	0.62	0.62	(0.03)	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G12	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	3.80	4.09	1.25	1.22	0.06	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G13	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	4.20	3.89	(1.34)	(1.34)	(0.04)	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G14	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.65	2.26	0.52	0.85	0.05	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G15	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	3.04	2.41	0.95	0.91	0.05	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G16	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.12	3.72	1.03	0.98	(0.02)	ガラス	やわらかい青緑（2.5BG6.5/4）	
G17	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.58	3.30	0.97	0.84	(0.02)	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G18	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.73	3.49	0.66	0.73	0.03	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G19	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.78	4.19	1.24	1.19	0.06	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G20	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.37	4.33	0.89	0.72	0.08	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G21	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.20	2.36	1.07	1.04	0.04	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G22	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	3.04	4.51	1.18	1.18	0.06	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G23	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.81	3.96	1.05	0.95	0.04	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G24	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	1.96	3.51	1.10	1.15	0.03	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G25	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.20	3.86	1.20	1.27	0.04	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G26	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.11	3.78	0.95	0.95	0.03	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G27	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.74	4.67	1.07	1.05	0.07	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G28	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	1.89	3.00	0.98	0.96	(0.03)	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G29	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	3.56	3.33	0.93	0.96	(0.03)	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G30	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.76	3.10	0.95	0.88	(0.03)	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G31	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.53	3.57	0.90	0.96	0.05	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G32	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.80	3.62	0.77	0.72	0.03	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G33	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	1.73	3.53	1.27	1.22	0.03	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G34	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.06	2.64	0.73	0.75	0.04	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G35	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.47	4.08	1.04	1.06	0.06	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G36	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.16	3.36	1.04	1.04	0.03	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G37	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.70	3.52	0.99	0.96	0.05	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G38	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.80	4.29	1.10	1.10	(0.03)	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G39	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.11	2.95	1.08	0.97	0.03	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G40	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.08	3.43	0.98	0.96	0.03	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G41	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	1.74	3.58	1.17	1.17	0.03	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G42	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	3.45	3.36	0.89	0.89	0.08	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G43	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.18	3.64	0.94	0.87	0.06	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G44	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.18	3.94	1.10	1.11	0.03	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G45	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.91	3.74	1.05	1.01	0.04	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	赤褐色物質？混入
G46	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.42	3.33	1.07	1.05	0.03	ガラス	こい紫みの青（7PB2.5/12）	
G47	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	3.62	4.62	1.25	1.25	0.12	ガラス	つよい青（7B4.5/6）	
G48	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.46	3.95	1.02	0.99	0.06	ガラス	あざやかな青（9B4.5/9）	
G49	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.16	4.43	1.28	1.25	0.05	ガラス	あざやかな青（9B4.5/9）	
G50	第55図	3号墳　竪穴式石室内	小玉	2.75	3.82	0.71	1.10	0.04	ガラス	明るい緑（2.5G7.5/8）	

掲載番号	掲載図番号	出土遺構名等	器種	計測値 (mm)				重量 (g)	材質	色調	備考
				最大長	最大幅	孔径 (大)	孔径 (小)			系統色名 (マンセル値)	
G51	第33図	3号墳 竪穴式石室	小玉	3.34	4.10	1.20	1.30	(0.03)	ガラス	あざやかな青 (4G7/6)	
-	-	3号墳 竪穴式石室	小玉	1.82	2.65	-	-	(0.03)	ガラス	あざやかな青緑 (7.5BG5/12)	
-	-	3号墳 竪穴式石室	小玉	2.20	2.67	-	-	(0.01)	ガラス	あざやかな青緑 (7.5BG5/12)	
		3号墳 竪穴式石室	小玉					0.99	ガラス		粉状
S14	第45図	4号墳 竪穴式石室	管玉	28.10	9.44	3.35	1.10	4.30	碧玉	ごく暗い青緑 (2.5BG2/2.5)	
S15	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	15.85	12.00	3.39	1.11	2.66	水晶	透明	下端に凹み
S16	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	15.22	13.05	3.10	1.47	3.05	水晶	透明	下端に凹み
S17	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	16.11	13.10	3.02	1.52	3.09	水晶	透明	下端に凹み
S18	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	16.22	12.51	3.34	1.20	3.02	水晶	透明	下端に凹み
S19	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	16.52	11.88	3.28	1.47	2.78	水晶	透明	下端に凹み
S20	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	16.22	12.38	3.52	1.13	2.80	水晶	透明	下端に凹み
S21	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	16.33	13.58	3.39	1.45	2.54	水晶	透明	下端に凹み
S22	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	17.55	13.75	3.65	1.13	4.14	水晶	透明	下端に凹み
S23	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	17.03	11.08	3.87	1.44	2.52	水晶	透明	下端に凹み
S24	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	17.27	13.26	3.37	1.31	2.60	水晶	透明	
S25	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	19.78	14.44	3.40	1.42	4.83	水晶	透明	下端に凹み
S26	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	18.44	13.57	3.36	1.45	2.87	水晶	透明	下端に凹み
S27	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	19.14	11.92	3.47	1.13	3.18	水晶	透明	下端に凹み
S28	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	24.09	15.01	3.35	1.50	5.19	水晶	透明	下端に凹み
S29	第45図	4号墳 竪穴式石室	切子玉	29.33	17.67	4.33	1.41	10.46	水晶	透明	下端に凹み
G52	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	7.25	9.65	1.94	1.34	0.94	ガラス	ごく暗い青 (2PB2/3.5)	
G53	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.41	4.51	1.51	1.42	0.09	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G54	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.16	4.46	1.14	1.14	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G55	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.52	5.01	1.42	1.25	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G56	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.00	2.84	1.26	1.03	0.09	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G57	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.41	2.99	1.37	1.24	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G58	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.53	4.89	1.41	1.40	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G59	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.77	4.07	1.17	1.17	(0.05)	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G60	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.30	4.06	1.15	1.15	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G61	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.54	4.26	1.39	1.44	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G62	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.75	2.45	0.84	0.82	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G63	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.73	4.18	1.23	1.14	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G64	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.75	2.97	1.07	1.04	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G65	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.00	4.42	1.33	1.28	0.10	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G66	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.68	3.30	1.08	0.95	0.04	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G67	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.72	3.86	1.51	1.48	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G68	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.41	4.58	0.98	0.96	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G69	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.07	5.61	1.07	1.00	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G70	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.75	3.70	1.24	1.23	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G71	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.22	4.05	1.21	1.15	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G72	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.04	4.38	1.43	1.38	0.08	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G73	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.65	4.68	1.73	1.67	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G74	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.13	4.31	1.50	1.42	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G75	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.19	2.81	1.29	1.22	0.04	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G76	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.70	3.62	0.94	0.92	0.04	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G77	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.94	4.40	1.55	1.55	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G78	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.63	3.60	0.95	0.88	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G79	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.78	4.36	1.42	1.42	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G80	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.10	2.78	1.24	1.21	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G81	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.30	2.60	0.94	0.92	0.02	ガラス	くすんだ青緑 (2.5G5/3)	
G82	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.28	4.99	2.20	1.88	0.09	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G83	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.53	3.53	1.12	1.10	0.03	ガラス	つよい紫みの青 (4PB4/8)	
G84	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.84	2.96	1.12	1.10	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G85	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.30	3.89	1.15	1.14	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G86	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.22	2.26	1.19	1.18	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G87	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.82	2.75	0.96	0.85	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G88	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.17	3.30	1.14	1.13	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G89	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.57	4.12	1.17	1.14	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G90	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	1.75	2.79	0.89	0.87	0.03	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G91	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.60	2.75	1.41	1.28	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G92	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	3.54	4.27	1.08	1.07	0.09	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G93	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.72	2.99	0.89	0.88	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G94	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.71	2.77	0.97	0.82	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	
G95	第45図	4号墳 竪穴式石室	小玉	2.54	4.41	1.26	1.20	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑 (10BG4/3)	

掲載番号	掲載図番号	出土遺構名等		器種	計測値（mm）				重量（g）	材質	色調	備考
					最大長	最大幅	孔径（大）	孔径（小）			系統色名（マンセル値）	
G26	第45図	4号墳	竪穴式石室	小玉	3.07	4.45	1.23	1.24	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G27	第45図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.90	4.28	1.67	1.65	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G28	第45図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.81	4.27	1.28	1.28	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G55	第45図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.33	3.03	0.95	0.92	0.04	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G100	第45図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.16	4.83	1.58	1.57	0.08	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G101	第45図	4号墳	竪穴式石室	小玉	3.04	3.95	1.29	1.42	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G102	第45図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.54	3.54	1.13	1.01	0.04	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G103	第45図	4号墳	竪穴式石室	小玉	3.12	2.66	1.03	1.15	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G104	第45図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.74	3.26	0.77	0.63	0.02	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G105	第45図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.84	4.37	1.27	1.28	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G106	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.56	4.09	1.43	1.38	0.04	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G107	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.63	4.81	1.51	1.44	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G108	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.35	4.36	1.55	1.42	0.06	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G109	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.53	4.06	1.11	1.03	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G110	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	3.05	4.19	1.23	1.21	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G111	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.00	3.65	1.09	1.07	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G112	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.55	2.89	1.06	1.04	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G113	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.59	4.20	1.01	1.00	0.04	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G114	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	3.20	3.38	0.94	0.80	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G115	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.89	4.64	1.13	0.95	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G116	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.43	4.03	1.37	1.41	0.04	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G117	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	3.24	2.64	1.28	1.12	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G118	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.48	3.83	1.14	1.07	0.05	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G119	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.53	2.10	1.08	0.92	0.03	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G120	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	1.89	2.15	0.96	0.87	0.02	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G121	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.35	4.36	1.41	1.22	0.07	ガラス	暗い灰みの青緑（10BG4/3）	
G122	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	4.22	3.69	1.19	1.00	0.06	ガラス	こい緑みの青（4B4/6）	
G123	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	4.73	4.88	1.38	1.47	0.15	ガラス	こい紫みの青（6PB3/8）	
G124	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.73	4.55	1.31	1.24	0.06	ガラス	ごく暗い青（2PB2/3.5）	
G125	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.54	3.78	1.02	0.87	0.07	ガラス	ごく暗い青（2PB2/3.5）	
G126	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.35	4.24	1.02	1.02	0.07	ガラス	ごく暗い青（2PB2/3.5）	
G127	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.00	4.14	1.29	1.10	0.05	ガラス	ごく暗い青（2PB2/3.5）	
G128	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	3.18	5.75	1.57	1.13	0.14	ガラス	暗い青（2PB3/5）	穿孔は片口形
G129	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.73	4.85	1.18	1.12	0.09	ガラス	こい青（7B4.5/6）	
G130	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	3.27	4.68	1.15	1.15	0.09	ガラス	あざやかな青緑（7.5BG5/12）	
G131	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.15	3.91	1.77	1.77	0.03	ガラス	つよい青（7B4.5/6）	
G132	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	4.49	4.09	1.03	1.03	0.10	ガラス	つよい青（7B4.5/6）	
G133	第46図	4号墳	竪穴式石室	小玉	2.26	4.33	1.20	1.20	0.04	ガラス	つよい青（7B4.5/6）	

※計測値欄と色調欄の「－」は、計測や観察が不能であることを表す。また、（数字）は、残存値を表す。
※色調は、『新版色の手帖』（永田泰弘監修　2002年）を基準として、系統色名とマンセル値を表示した。（ただし水晶製は除く。）

表8　石製品一覧表

掲載番号	掲載図番号	出土遺構名等	器種	計測値（mm）			重量（g）	石材	色調	備考
				最大径	最大厚	孔径				
S13	第35図	3号墳周溝内	紡錘車	35.57	13.58	5.87	(20.98)	滑石	にぶい赤褐色（2.5YR5/4）	鋸歯文

※重量欄の（数字）は、残存値を表す。
※色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　財団法人日本色彩研究所色票監修）を基準として、色名とマンセル値を表示した。

表9　金属製品一覧表

掲載番号	掲載図番号	出土遺構名等		器種	計測値（mm）			重量（g）	材質	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
M1	第21図	2号墳	玄室	大刀	(673.06)	39.5	10.00	(1132.06)	鉄	
M2	第21図	2号墳	玄室	鏃	(102.73)	42.53	4.54	(25.77)	鉄	
M3	第21図	2号墳	玄室	鏃	(55.82)	25.20	2.20	(5.73)	鉄	
M4	第21図	2号墳	玄室	鏃	(83.37)	23.04	3.78	(13.42)	鉄	
M5	第21図	2号墳	玄室	鏃	(88.10)	23.21	3.62	(18.00)	鉄	
M6	第21図	2号墳	玄室	鏃	(98.73)	32.81	3.42	(21.49)	鉄	
M7	第21図	2号墳	玄室	鏃	(54.09)	34.11	5.47	(3.82)	鉄	
M8	第21図	2号墳	箱式石棺	刀子	(123.45)	15.85	3.62	(14.90)	鉄	一部木質残存
M9	第21図	2号墳	箱式石棺	耳環	-	(2.00)	(2.26)	(0.38)	銅	芯のみ　径20mm
M10	第21図	2号墳	玄室	耳環	-	(2.30)	(1.50)	(0.27)	銅	芯のみ　径20mm
M11	第32図	3号墳	竪穴式石室1	鏃	(122.81)	27.22	4.00	(58.52)	鉄	
M12	第32図	3号墳	竪穴式石室1	鏃	140.17	20.01	4.96	(19.11)	鉄	
M13	第32図	3号墳	竪穴式石室1	鏃	170.02	29.42	4.33	50.52	鉄	
M14	第32図	3号墳	竪穴式石室1	釘	(11.87)	7.56	1.39	(0.58)	鉄	

※計測値欄の「－」は、計測不能を表す。

1　弥上地区遠景（北西から）

2　調査地遠景（北西から）

図版 2

1　調査前全景（南西から）

2　調査後全景（南西から）

1　2・3・4号墳全景（北西から）

2　盛土除去後の2・3・4号墳全景（上空から）

図版 4

1　2号墳全景（西から）

2　2号墳全景（南から）

3　2号墳北側　墳丘断面（北から）

4　2号墳南側　墳丘断面（南から）

5　2号墳玄室床面（西から）

1　2号墳玄室壁面（西から）

2　2号墳玄室～羨道（東から）

図版 6

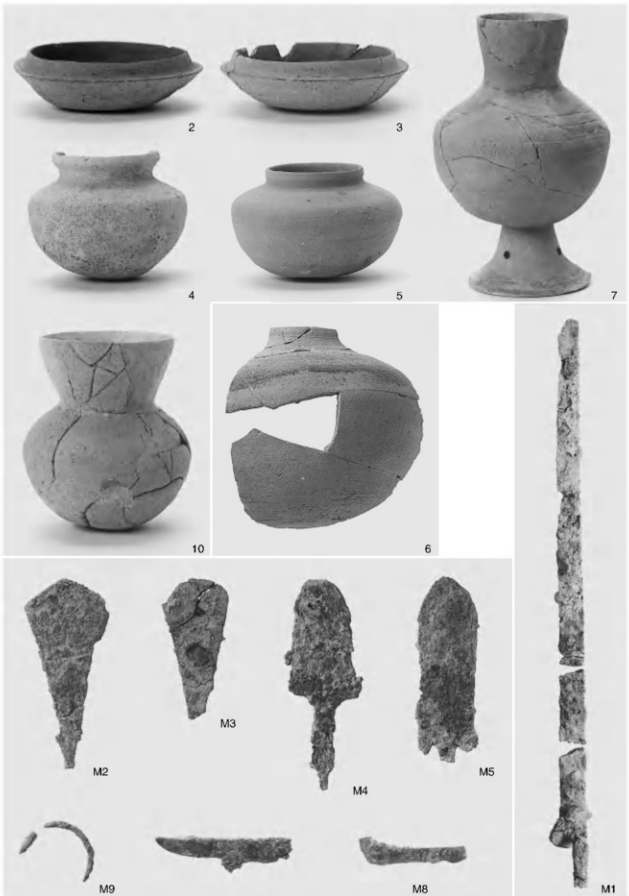
1　2号墳羨道北壁（南西から）

2　2号墳羨道　排水溝蓋石出土状態（東から）

3　2号墳玄室　排水溝（蓋石除去後）（西から）

4　2号墳閉塞施設立面（西から）

5　2号墳閉塞施設（南から）



2 号墳出土遺物

図版 8

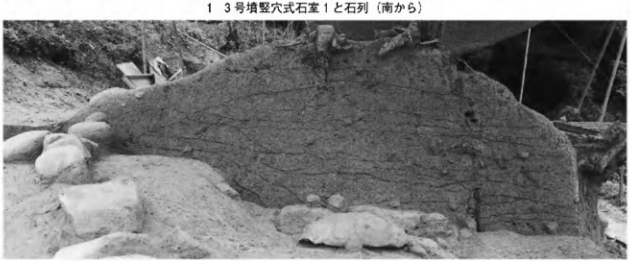
1　3号墳全景（南から）

2　3号墳初期の南側石列（南から）

3　3号墳拡張時の南側石列（南東から）

4　3号墳埋葬施設と石列（上空から）

1　3号墳竪穴式石室1と石列（南から）



2　3号墳墳丘断面（北から）

3　3号墳拡張時の盛土断面（西から）

図版10

1　3号墳竪穴式石室1　天井石（北から）

2　3号墳竪穴式石室1（北から）

3　3号墳竪穴式石室1　東壁（北西から）

4　3号墳竪穴式石室1　西壁（南東から）

5　3号墳竪穴式石室1　遺物出土状態（北から）

1　3号墳竪穴式石室２　天井石（東から）

2　3号墳竪穴式石室２（東から）

3　3号墳竪穴式石室２　北壁（南西から）

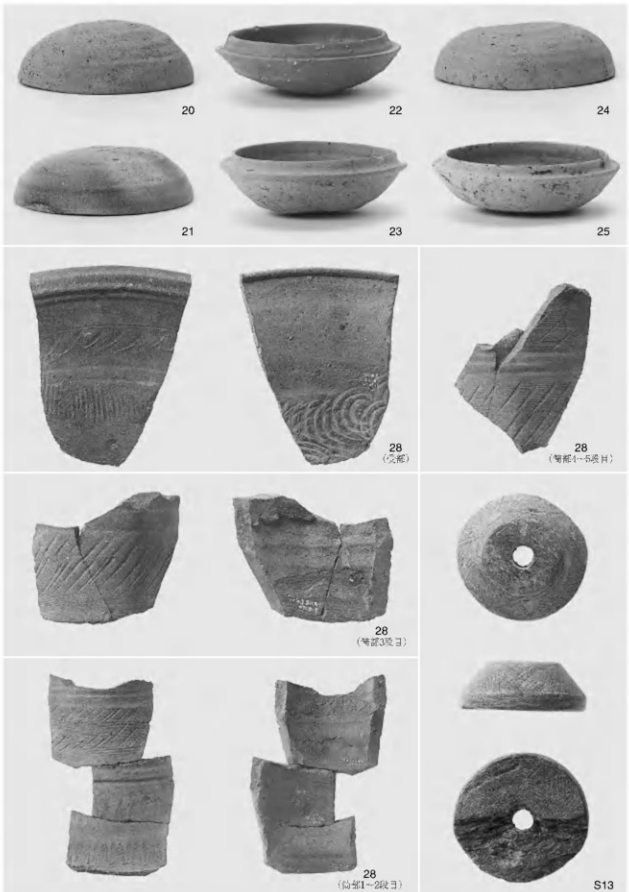
4　3号墳竪穴式石室２　南壁（北東から）

5　3号墳竪穴式石室２北側　掘り方断面（東から）

6　3号墳竪穴式石室２　東小口遺物出土状態（西から）

図版12

3 号墳出土遺物①



3号墳出土遺物②

図版14

1　4号墳全景（南西から）

2　4号墳埋葬施設と石列（上空から）

3　3号墳と4号墳（南西から）

4　4号墳北側石列（北から）

5　4号墳南側石列（南から）

1　4号墳竪穴式石室天井石と遺物出土状態（北から）

2　4号墳竪穴式石室（北から）

3　4号墳竪穴式石室　西壁（南東から）

4　4号墳竪穴式石室　東壁（南西から）

5　4号墳竪穴式石室　南小口遺物出土状態（北から）

6　4号墳竪穴式石室　北小口遺物出土状態（南から）

図版16

4号墳出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ふぼろこふんぐん
書名	婦本路古墳群
副書名	主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築に伴う発掘調査
巻次	7
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	225
編著者名	柴田英樹　笹栗　拓　内藤善史　光永真一
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター
所在地	〒701-0136　岡山県岡山市北区西花尻1325-3　TEL　086-293-3211 URL　http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm
発行機関	岡山県教育委員会
所在地	〒700 8570　岡山県岡山市北区内山下２４６　TEL　086 224 2111
発行年月日	2010年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
婦本路古墳群	岡山県赤磐市 赤上121-1ほか	33213	（2号墳） 333240226 （3号墳） 333240227 （4号墳） 333240228	34°46′36″	134°3′31″	2007.4.1 ～ 2007.9.30	850 ㎡	主要地方道佐伯長船線（美作岡山道路）道路改築（本線：熊山IC以南）道路改築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
婦本路2号墳	古墳	古墳時代後期	古墳1基 （横穴式石室1基）	須恵器、土師器、大刀、鉄鏃、刀子、耳環	
婦本路3号墳			古墳1基 （竪穴式石室2基）	須恵器、鉄鏃、管玉、算盤玉、切子玉、ガラス玉、石製紡錘車	
婦本路4号墳			古墳1基 （竪穴式石室1基）	須恵器、管玉、切子玉、ガラス玉	

要約	婦本路2・3・4号墳は、6世紀後半のなかで、短期間のうちに築造された古墳である。 2号墳は、右片袖式の横穴式石室を有する径8.0 mの円墳である。全長6.29 mの石室は西に開口し、玄室長は3.45 m、幅は1.36 mを測る。排水溝を伴い、閉塞施設も残存していた。玄室内には箱式石棺1基が確認された。当地域では、比較的古い時期の横穴式石室である。 3号墳は、竪穴式石室を埋葬施設とする径6.1 mの円墳で、2回目の埋葬時に径8.4 mに拡張されていることが判明した。墳丘は、盛土に伴って裾に石列を巡らせる。竪穴式石室は、長さ約199 cmと195 cmの2基で、枕や供献品としての須恵器などが出土した。前者では、玉類や鉄鏃も出土した。 4号墳は、竪穴式石室を埋葬施設とする径7.1 mの円墳である。墳丘は、盛土に伴って裾に石列を巡らせる。竪穴式石室は、長さ約182 cmで、枕や供献の須恵器、玉類が出土した。

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告225

婦本路古墳群

主要地方道倉敷長船線（美作岡山
道路）道路改築に伴う発掘調査7

平成22年3月12日　印刷
平成22年3月31日　発行

編　集　岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花尻1325-3
発　行　岡山県教育委員会
岡山市北区内山下２１６
印　刷　友野印刷株式会社
岡山市北区高柳西町1-23